国見町文化財調査報告書(概報)　第２集

松尾遺跡

（まつお）

－金山（かなやま）地区圃場整備事業に伴う発掘調査概報－

２００２

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成８年度・９年度に実施しました金山地区圃場整備事業に伴う松尾遺跡の緊急発掘調査（概報）の報告書を発刊することになりました。

松尾遺跡は，国見町高下名に所在します。旧石器時代～奈良平安時代まで続く複合遺跡で，特に旧石器時代の石器群は九州でも最古級の可能性が高く，中期旧石器時代のものと考えられています。また，縄文時代においても県内で初めて縄文早期の耳栓（ジセン＝土製のピアス）が出土するなど貴重な発見が相次いでいます。

このほか，旧石器時代では後期旧石器時代初頭の石器群，および後期旧石器時代中頃の石器群。長崎県では松尾遺跡と百花台遺跡でしか出土していない縄文時代早期の壺形土器の出土など貴重な資料が多いことは特筆すべきことです。また，このように幅広い時代にわたって古代人（国見町の祖先たち）の生活の痕跡が確認される例はまれであり，その点でも松尾遺跡は非常に重要な遺跡であります。国見町の歴史のみならず，長崎県あるいは九州の歴史を語る上で「鍵」となる遺跡と言えましょう。

このような貴重な遺跡は，わが町の歴史・文化を正しく理解するために欠くことのできないもので，町としても重要な文化遺産として活用するとともに，文化の向上・発展につなげてまいりたいものです。また，この貴重な文化財を後世に伝えていくことは郷土を知り，引いてはふるさとを愛することにも繋がることを肝に銘じたいと思います。国見町にはまだまだ埋蔵文化財が存在する可能性が高く，今後とも注意を払って見守りたいと思います。

最後に，今回の調査にあたり，地元土地所有者の皆様，工事関係者，御指導御協力をいただきました県学芸文化課ならびに関係の先生方，調査作業等に従事していただきました作業員の皆様に心から感謝申し上げ発刊のあいさつにいたします。

平成14年３月31日

長崎県国見町教育委員会
教育長　原　宮之

例　　言

1．本概報は1996年～1998年（平成８年度・平成９年度）に実施した金山地区圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する松尾遺跡の緊急発掘調査の概報である。

2．調査は国見町教育委員会が担当した。
調査は1996年５月27日から７月11日（平成８年度）に範囲確認調査を実施し，その結果をもとに1997年１月10日から３月７日（平成８年度）及び1997年11月27日から1998年３月23日（平成９年度）までの間実施した。

3．調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教育長　阿比留亨（当時）
	同	教育次長　松本安央（当時）
	同	社会教育係長　江副俊一郎
調査担当	同	教育次長　松本安央（当時）
	同	文化財調査員　松崎由紀子（当時）
	同	社会教育係　辻田直人

4．遺構・遺物の実測は酒井由紀子・桑塚秀樹・茂輝彦・山下典之・東文子・林繁美・早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井恵・松崎・辻田が行い，製図は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井恵・辻田が行った。写真は現地調査を松崎・辻田が，遺物写真は竹中哲朗氏に協力をいただいた。巻頭カラー写真は渡邊康行氏に，旧石器時代の石器①は荒木伸也氏に協力いただいた。

5．縄文土器及び須恵器・瓦の実測の大半及び石器の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

7．第４章第１節は川道寛氏に協力をいただいた。

8．第３章，第４章第３節，第５章第３節は竹中哲朗氏に協力をいただいた。

9．石器実測図の点線は当時の折れ，実線は発掘時の折れである。

10．方位はすべて真北である。

11．現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた，記して謝意を表します。
橘昌　信（別府大学教授），松藤和人（同志社大学助教授），佐川正敏（東北学院大学），長岡信治（長崎大学教育学部助教授）佐藤良二（二上山博物館），水ノ江和同（福岡県総務部国立博物館対策室），早田　勉（古環境研究所），中川和哉（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター），絹川一徳（大阪市文化財協会），森川　実，萩原博文（平戸市教育委員会），川道　寛（長崎県立西高等学校），渡邊康行，古門雅高（長崎県教育庁学芸文化課），荒木伸也（長崎県有家町教育委員会），竹中哲朗（長崎県教育庁学芸文化課），福岡旧石器文化研究会，長崎県教育庁学芸文化課，（順不同）

12．本書の編集は辻田による。

本　文　目　次

巻頭カラー①　縄文土器
巻頭カラー②　ナイフ形石器他

第１章　調査の経緯
　第１節　発掘調査にいたる経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……1

第２章　島原半島と松尾遺跡
　第１節　国見町の歴史的環境……2
　第２節　松尾遺跡の地理的・地形的環境……4
　第３節　層　　位……4

第３章　検出された遺構と遺物
　第１節　土坑・住居跡・掘立柱建物……5
　第２節　遺構出土の遺物……7

第４章　遺　　物
　第１節　旧石器時代の遺物（１）……9
　第２節　旧石器時代の遺物（２）……13
　第３節　縄文時代早期及びその他の土器……16
　第４節　縄文時代の石器……29

第５章　ま　と　め
　第１節　旧石器時代について……35
　第２節　縄文時代について……35
　第３節　古墳時代について……37

挿　図　目　次

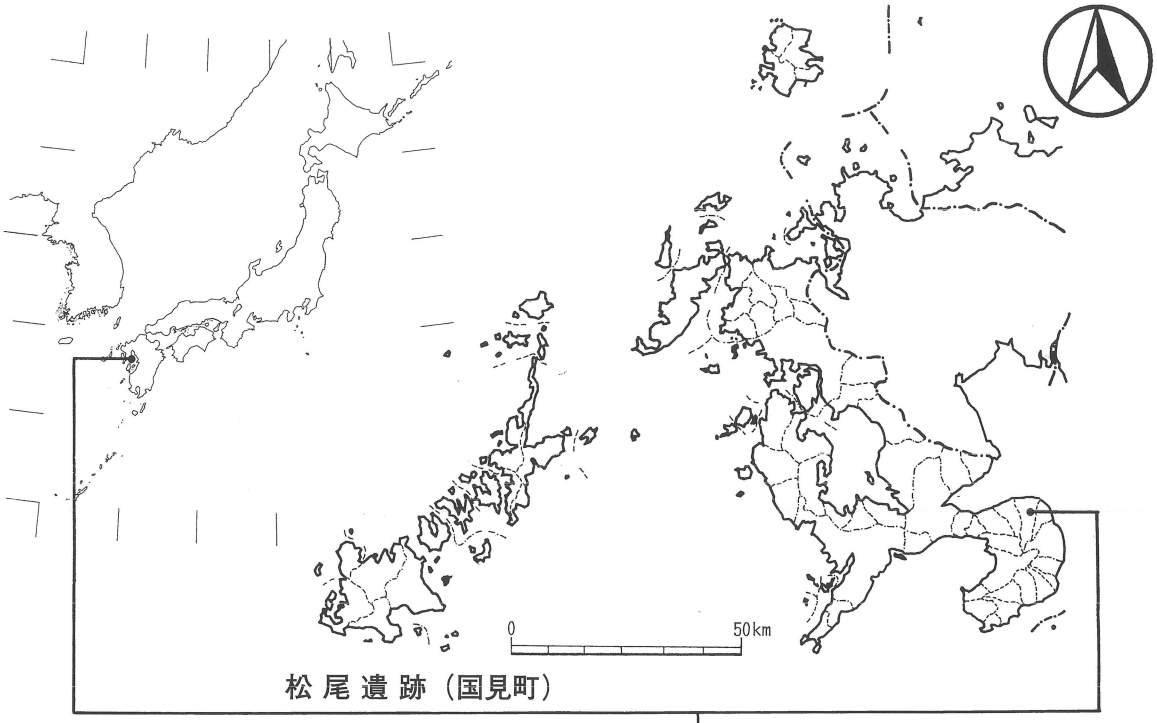
第１図　遺跡位置図
第２図　調査区配置図……1
第３図　国見町遺跡地図……3
第４図　基本土層図……4
第５図　土　　坑（１/80）……5
第６図　住 居 跡（１/40）……5
第７図　掘立柱建物（１/40）……6
第８図　土坑出土遺物（１/３）……7
第９図　住居跡出土遺物（１/３・１/２）……8
第10図　旧石器時代の石器①（２/３）……11
第11図　旧石器時代の石器②（２/３）……12
第12図　旧石器時代の石器③（２/３）……14
第13図　旧石器時代の石器④（２/３）……15
第14図　縄文時代の土器①（１/２）……19
第15図　縄文時代の土器②（１/２）……21
第16図　縄文時代の土器③（１/２）……22
第17図　縄文時代の土器④（１/２）……23
第18図　縄文時代の土器⑤（１/２）……24
第19図　縄文時代の土器⑥（１/２）……25
第20図　その他の土器（１/２）……28
第21図　縄文時代の石器①（２/３）……30
第22図　縄文時代の石器②（２/３）……31
第23図　縄文時代の石器③（２/３）……32
第24図　縄文時代の石器④（１/４・１/３）……33
第25図　松尾遺跡類似資料（２/３）……36

表　目　次

第１表　主要遺跡一覧表……3
第２表　土坑・住居跡出土遺物観察表……8
第３表　旧石器時代遺物計測表①……10
第４表　旧石器時代遺物計測表②……16
第５表　土器観察表①（早期）……26
第６表　土器観察表②（早期）……27
第７表　土器観察表③（その他の土器）……28
第８表　縄文時代石器計測表……34
第９表　島原半島の古墳時代住居跡……37

写　真　図　版

図版１　松尾遺跡周辺航空写真（昭和35年頃国土地理院）……41
図版２　遺跡近景　調査風景　遺物検出状況　古墳時代住居跡検出状況　石皿検出状況
磨石検出状況　土層検出状況　完掘状況……42
図版３　縄文時代の土器①……43
図版４　縄文時代の土器②……44
図版５　縄文時代の土器③……45
図版６　縄文時代の土器④……46
図版７　縄文時代の土器⑤……47
図版８　縄文時代の土器⑥……48
図版９　その他の土器……49
図版10　土坑・住居跡出土の土器①……50
図版11　土坑・住居跡出土の土器②……51
図版12　土坑・住居跡出土の土器③……52
図版13　縄文時代の石器①……53
図版14　縄文時代の石器②……54
図版15　縄文時代の石器③……55
図版16　旧石器時代の石器①……56
図版17　旧石器時代の石器②……57
図版18　旧石器時代の石器③……58



第１図　遺跡位置図

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

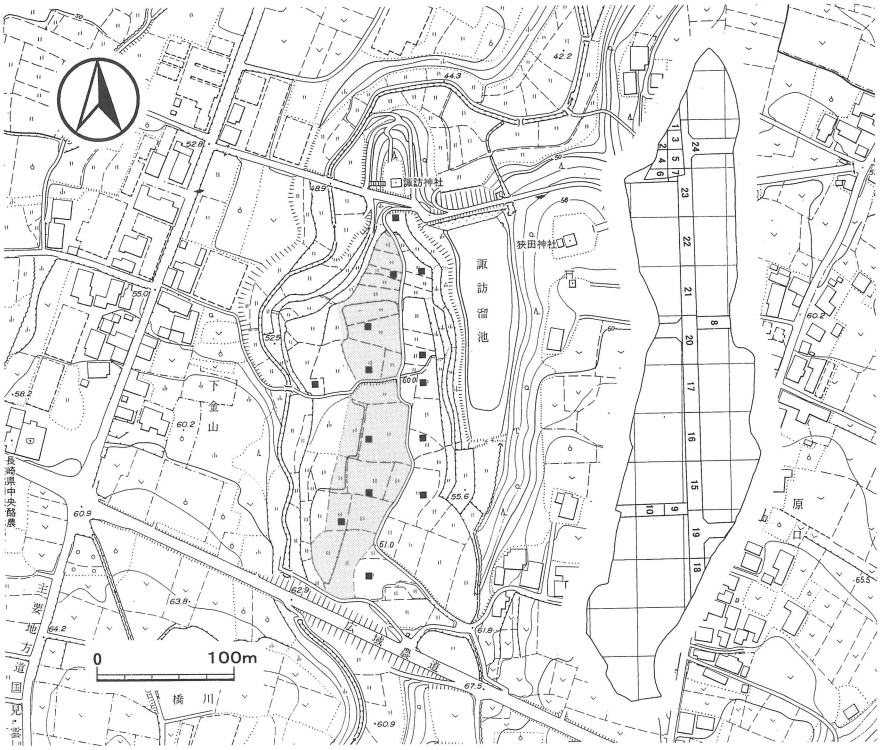
平成７年度に国見町産業振興課より，金山遺跡及び五万長者遺跡隣接地における町営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け，国見町教育委員会が主体となり1996年５月27日から７月11日（平成８年度）にかけて遺跡範囲確認調査を行った。調査は国土座標Ⅰ系を使用し，圃場整備事業予定範囲を40mメッシュに区切り，その中に２ｍ×２ｍの試掘坑１箇所を基本として，計14箇所（56m²）の調査を行った。その結果，事業予定地の約半分の面積に当たる12,500m²の範囲に古代及び縄文時代早期の遺物包含層及び遺構が確認された。協議の結果，設計変更により遺跡の大部分は盛土により保存し，農道・用排水路および掘削により破壊される部分については本調査（1,500m²）を行うこととなった。本調査は1997年１月10日から３月７日（平成８年度）及び1997年11月27日から1998年３月23日（平成９年度）の間行った。

第２節　発掘調査の経過

本調査は国土座標Ⅰ系を使用し，調査対象範囲を20ｍメッシュに区切り，調査した順に１区から24区（11区～14区は欠番）に分けて実施した。平成８年度分の調査については，部分的に８ｍメッシュに区切り調査を実施した。全体に包含層までの深さが相当にあり，重機により古代遺物包含層直上まで除去しその後はすべて人力により発掘した。古代の遺物については同一層一括で取り上げ，縄文時代早期の遺物についてはすべてドットマップを作製し取り上げた。発掘は可能な限り下層まで掘り下げ岩盤の検出まで行った。

古代の遺物は調査範囲の北側半分に薄く堆積しており，出土量も少なかったが，竪穴住居跡を１軒確認できた。また，掘立柱建物の柱穴と考えられる等間隔の柱穴列も確認された。

縄文時代早期の遺物・遺構は調査範囲全体に分布しており，膨大な数が検出されている。調査が進むにつれて，縄文時代早期の遺物に混じって旧石器時代の遺物が混入していることが明らかとなった。早期包含層の下に旧石器時代の包含層が存在することが想定されたが，調査日数の制限，緊急に他の遺跡の発掘調査の必要性が生じ，旧石器時代遺物と縄文時代早期遺物の層位的な分離を確認するにいたらなかった。その点が非常に悔やまれる。



第２図　試掘抗・調査区配置図

第２章　島原半島と松尾遺跡

第１節　国見町の歴史的環境

国見町は島原半島の北端に位置し，雲仙から有明海に向かって撥状に広がる。面積38.20㎢，人口11,905人を数える。主な基幹産業は農業で，近年はイチゴのビニールハウス栽培が特に盛んである。その他の農作物では「八斗木（ハットギ）白ねぎ」が有名で都心の高級料亭でも需要が多い。また，以前は漁業が盛んで，明治初期から戦後までは「バッシャ船」と呼ばれる大型の木造船で東シナ海まで漁に出ていた。現在はその役目を終えた最後のバッシャ船が国立民俗学博物館保存されている。昭和31年からは海苔の養殖も開始され町水産業の根幹を担ったが，現在では海苔養殖業者は激減し，多比良地区国道251号線沿いに立ち並ぶ「海苔乾燥小屋」が当時の面影を残すのみとなっている。そのほか，有明海で取れる渡りガニの「がざみ」が外洋から渡ってくる際，国見町多比良近海で収穫される時期が最もうまみが増すとされ「多比良ガネ」とよばれて珍重されている。ちなみに町のキャッチフレーズは『フルーツと多比良ガネとサッカーのまち国見町』である。

国見町の歴史は古く旧石器時代まで遡らなければならない。また，その重要性においても計り知れないものがある。その卓越したフィールドにおいて，特に旧石器・縄文時代の遺跡については，多くの先学たちによって調査が行われ多大な成果が得られている。また，近年は町内の開発事業（主に農業基盤整備事業）に伴い多くの緊急調査が実施され新しい資料が増加しつつある。ここでは，その近年の調査について若干触れ，国見町の歴史的環境について述べたい。ほとんどの事柄について未発表であるが，今後報告書等刊行予定である。

旧石器時代－今回報告する松尾遺跡や百花台遺跡・石原遺跡・卯才町（うさいまち）遺跡などがある。百花台遺跡はこれまで多くの研究成果かがあり説明はそちらに譲る。石原遺跡は以前報告（2000川道・辻田）した経緯があり，後期旧石器時代の局部磨製石斧や台形石器などが検出されている。卯才町（うさいまち）遺跡は平成13年度に新規発見された遺跡で，筏遺跡に近接する標高８ｍの低台地上に位置する。土層の堆積が良好で，火山灰分析は行なっていないがアカホヤ・ATが確認される。遺物は原の辻型台形石器が検出されている。

縄文時代－百花台遺跡や筏遺跡・松尾遺跡・小ヶ倉（こがくら）Ａ遺跡などがある。筏遺跡も百花台と同じくこれまで多くの学術調査が行われ多くの成果があるが，遺跡付近は宅地化が著しく，遺跡は消滅の危機に瀕している。平成８年度の宅地造成に伴う調査では御領式段階の円形の住居跡が検出されている。県内では初見であろう。小ヶ倉Ａ遺跡は百花台遺跡から１㎞ほど北に位置し，標高は百花台より70ｍほど下がる。平成13年度の試掘調査により，アカホヤ火山灰再堆積層直下から右京西式単純の遺跡が確認されている。３ｍ×３ｍの試掘抗に過ぎないが，300点以上の土器片が出土し，黒曜石原石集石も検出されており包含層・遺構ともに良好な状態で埋蔵されている。百花台遺跡で未発見の，早期末塞ノ神・平栫系土器群と轟式土器群の間を埋める時期の遺跡と想定される。

弥生時代－佃遺跡や十園（じゅうぞの）遺跡・小中野（こなかの）Ａ・Ｂ遺跡がある。佃遺跡は平成５年度に新規発見された遺跡で平成６年度～平成10年度にかけて調査を行った。縄文晩期から中世にかけての複合遺跡であるが弥生時代中期後半及び古代に遺跡の画期がある。弥生時代中期後半の遺跡からは２重の環濠や住居跡，大型の掘立柱建物，甕棺などが検出されており，環濠集落と想定される。住居跡は10軒程しか検出されていないものの，特筆すべきはその大きさで，最大のもので長軸14ｍ，短軸13ｍをはかり，楕円形を呈する。そのほかの住居もおおむね直径が10ｍ前後と大型である。また，旧河川跡からは100基を超える木製品水付け遺構が検出され，大量の木製品が作製されていた

と想定されるが，島原半島では一様に人骨や木製品等は残存しない傾向にあり，佃遺跡でも見つかっていない。したがって，明確に木製品水付け遺構とは断定できない。十園遺跡も中期後半の遺跡で２重の環濠，住居跡，甕棺などが検出されている。住居跡は隅丸方形を呈し，また，大量の肥後系土器（黒髪式土器）が出土しており佃遺跡とは違う様相が伺える。小中野Ａ・Ｂ遺跡も中期後半の遺跡である。総じて島原半島では中期後半頃に遺跡の画期が見出される。

古墳時代及び古代－佃遺跡・矢房（やふさ）遺跡・五万長者遺跡・石原遺跡・小中野Ａ・Ｂ遺跡などがある。佃遺跡や矢房遺跡からは古墳時代の住居から良好な土師器が検出されている。近年，隣町の有明町一野遺跡（宇土・竹中2001）でも近い時期の良好な資料が検出されており，半島内の土師器編年において重要な資料となる。五万長者遺跡は老司系布目瓦が検出されることで古来から知られている。肥前国高来郡郡家の推定地とされてきたが，近年の長崎県教育委員会の調査によれば「高来郡郡家に付随する郡寺跡」とされており，本馬貞夫氏によれば「五万長者廃寺跡とするのが妥当であろう」としている。石原・小中野Ａ・Ｂ遺跡からは７世紀末～８世紀にかけての遺物・遺構が多く見つかっている。墨書土器や刻書土器も多くあり，近接する五万長者遺跡とならんで当時の中心的な集落の跡と考えられる。

番号	遺跡名	時代	備考
5	筏	縄文後期～晩期	御領期住居跡・カメ棺群
11	佃	弥生中期～古代	環濠集落
12	十園	弥生中期～古代	環濠集落
18	五万長者屋敷	旧石器～古代	老司系布目瓦
35	小ヶ倉Ａ	縄文早期末	右京西単純
39～44	百花台	旧石器～古代	
61	卯才町	旧石器	原の辻型台形石器
65	小中野Ａ	弥生中期～古代	刻書土師器
66	小中野Ｂ	弥生中期～古代	墨書土師器
67	矢房	旧石器～中世	古代住居跡
69	松尾	旧石器～古代	
70	石原	旧石器～中世	台形様石器・局部磨製石斧

第１表　主要遺跡一覧表

第３図　国見町遺跡地図

第２節　松尾遺跡の地理的・地形的環境（図版１）

島原半島の北側は，南側の急峻な地形と異なり，雲仙岳より広がるなだらかな火山性扇状地が広がる。国見町はその扇状地のほぼ中央を南北に切り取るような行政区となっている。町内で最も標高の高い九千部岳で1,062mをはかり，北に約10kmで有明海に達する。松尾遺跡は海岸から約３kmの距離で，標高は約60mを測る。雲仙岳より伸びる丘陵先端部に続くやや独立した舌状丘陵上にある。丘陵先端からの眺めは非常に見晴らしがよく，有明海を越えて福岡・熊本まで一望できる。丘陵は南北に約300m，東西に約150mを測り，遺跡はその尾根筋に沿って南北300m，東西50mの範囲に検出される。丘陵の北・東・西側は急激に落ち込み，西側は多比良川が北上し，東側は現在溜池となっている。当時はこちらも河川だったのであろう。それぞれとの比高差は約７mを測る。この辺りの地形は，普賢岳起源の人指状に伸びる古い火砕流堆積物（丘陵）上にあり，新しい火砕流堆積物は人指状の「また」の部分から低地に流れ込み，それに覆い隠されるのを免れる位置となっている。事実丘陵下で発掘調査を行うと，約4,000年前と考えられている「六ツ木火砕流」関連の堆積層が数mにわたって確認できる。

第３節　層位（図版２）

本遺跡の層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層から第Ⅳ層：水田耕作土，床土，旧水田耕作土である。

第Ⅴ層：黒褐色を呈し，粘性は弱く５mmから10mmほどの礫を少量含む。古代遺物包含層で，遺跡の南半分に薄く（５cmほど）存在する。

第Ⅵ層：赤茶色を呈し，やや粘性に富むがあまりしまりは無くやわらかい。

第Ⅶ層：薄い赤茶色を呈し，第Ⅵ層と同じくやや粘性に富む。第Ⅵ層・第Ⅶ層が本遺跡の主要遺物包含層で旧石器時代から縄文時代早期までの遺物が混在する。

第Ⅷ層：茶色を呈するややしまりがあり硬質である。部分的には欠落している場所もある。百花台遺跡の層位と比較すると第Ⅵ層と考えられる。

第Ⅸ層：暗黒色を呈ししまりがない。百花台遺跡の層位と比較すると第Ⅶ層と考えられる。

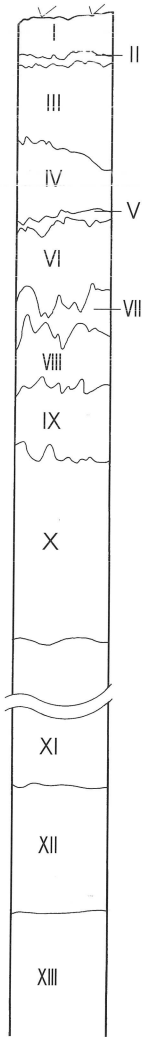
第Ⅹ層：明黄色を呈し非常に粘性が強い。一本松火砕流に伴う堆積層で，かなり風化が進んでいる。百花台遺跡の層位と比較すると第Ⅷ層と考えられる。

第Ⅺ層：厚さ数mに及ぶ礫層で，雲仙起源の一本松火砕流及びそれに伴う土石流である。

第Ⅻ層：黄色を呈し非常に粘性が強い水成堆積層である。阿蘇４火砕流堆積物をブロック状に含む。

第ⅩⅢ層：風化の進んだ段丘礫層である。

※百花台遺跡の土層との対比は『百花台東遺跡』（松藤1994）及び『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（田川・副島・伴1988）を参考とした。また，第Ⅺ層以下の層序については調査後，遺跡近接の露頭において観察を行った。



第４図　基本土層図

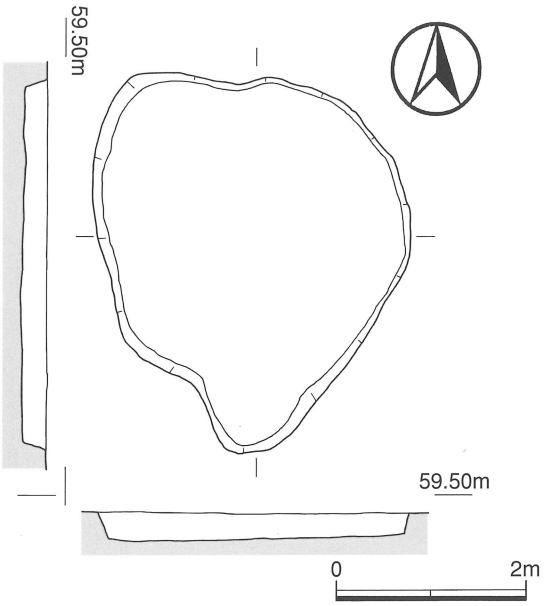
第３章　検出された遺構

第１節　土坑・住居跡・掘立柱建物

遺構は土坑・住居跡・掘立柱建物柱建物・集石が検出された。今回の概報では，古代の土坑・住居跡・掘立柱建物柱建物について報告する。縄文時代及び旧石器時代と考えられる土坑・集石については本報告時に項を設けたい。

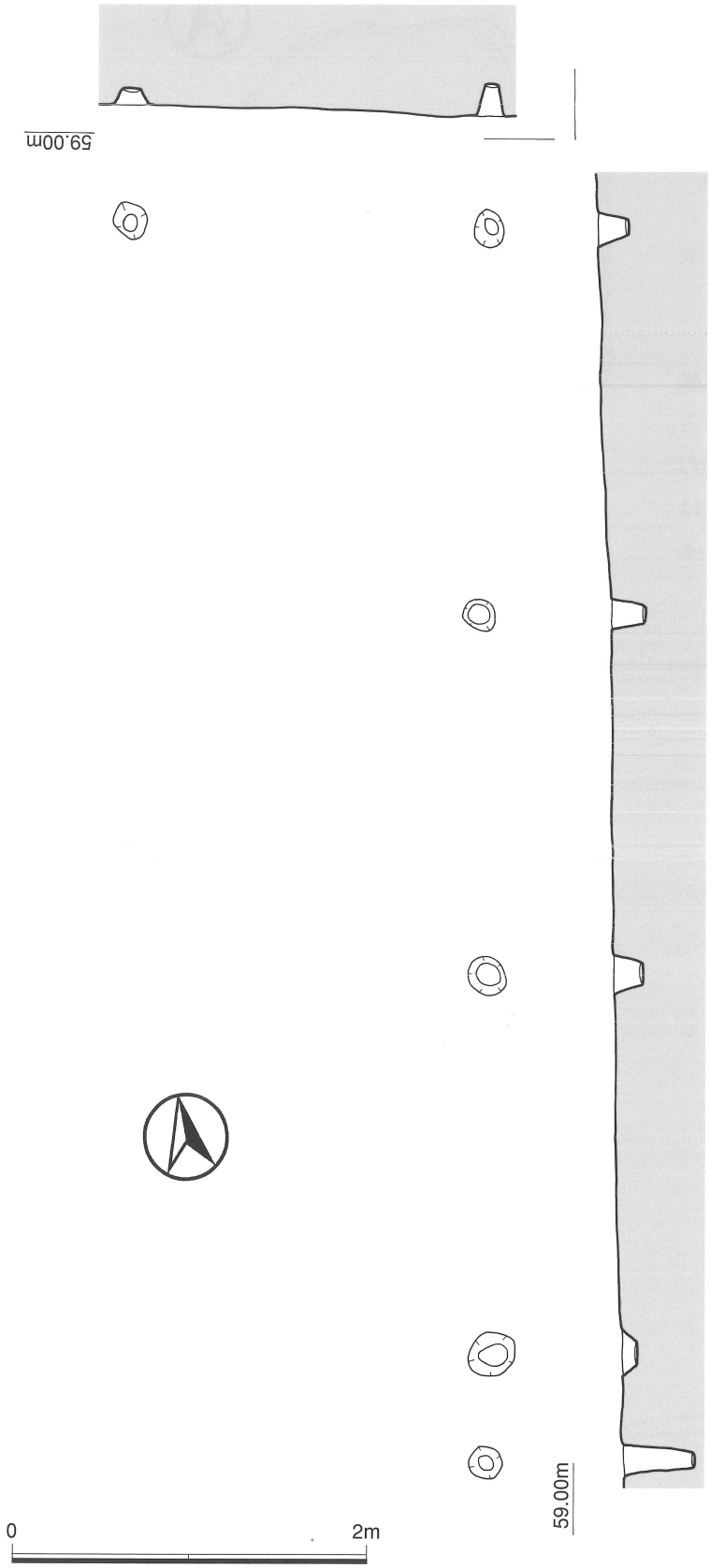
土坑（第５図）

土坑は16区から検出され，長軸3.8m．短軸3.4mのいびつな円形で，深さは20㎝程である。第Ⅵ層上面から掘り込まれているが，検出時のプランははっきりしていない。また，図面上は土坑断面の立ち上りがしっかりしているが，本



第５図　土　　坑（1/80）

第６図　住 居 跡（1/40）（アミ部は焼土跡）



第７図　掘立柱建物（１/40）

来は凸レンズ状の断面であったと想定される。この土坑については，後述の住居跡の直上にあり，遺構検出面の高さも10数cmの差でしかない。住居廃絶後のくぼみを後世に廃棄土坑等として利用したものを調査時点では別の遺構とらえており，それぞれに出土遺物の時期差があるものの，本来は同じ住居跡の遺構と考えられる。

住居跡（第６図　図版２）

住居跡は16区から検出され，東側の立ち上がり部分が未確認であるが，１辺4.3mの隅丸方形を呈す。住居跡の上層には前述の土坑（住居廃絶後のくぼみ）が覆いかぶさり，第Ⅵ層を若干掘り込んだ時点でプランをはっきりと確認できた。床面は全面に硬化部分がみられ，直上には炭化材が多く見られる。焼失住居であろう。住居中央部よりやや北側の床面には炉跡と考えられる焼土が検出されている。また，それ以外にも小規模な焼土跡が３ヶ所ほど確認できる。柱穴は平面的には検出できず，断面観察時に掘り下げた際に住居中央東側に１ヶ所確認できたに過ぎない。

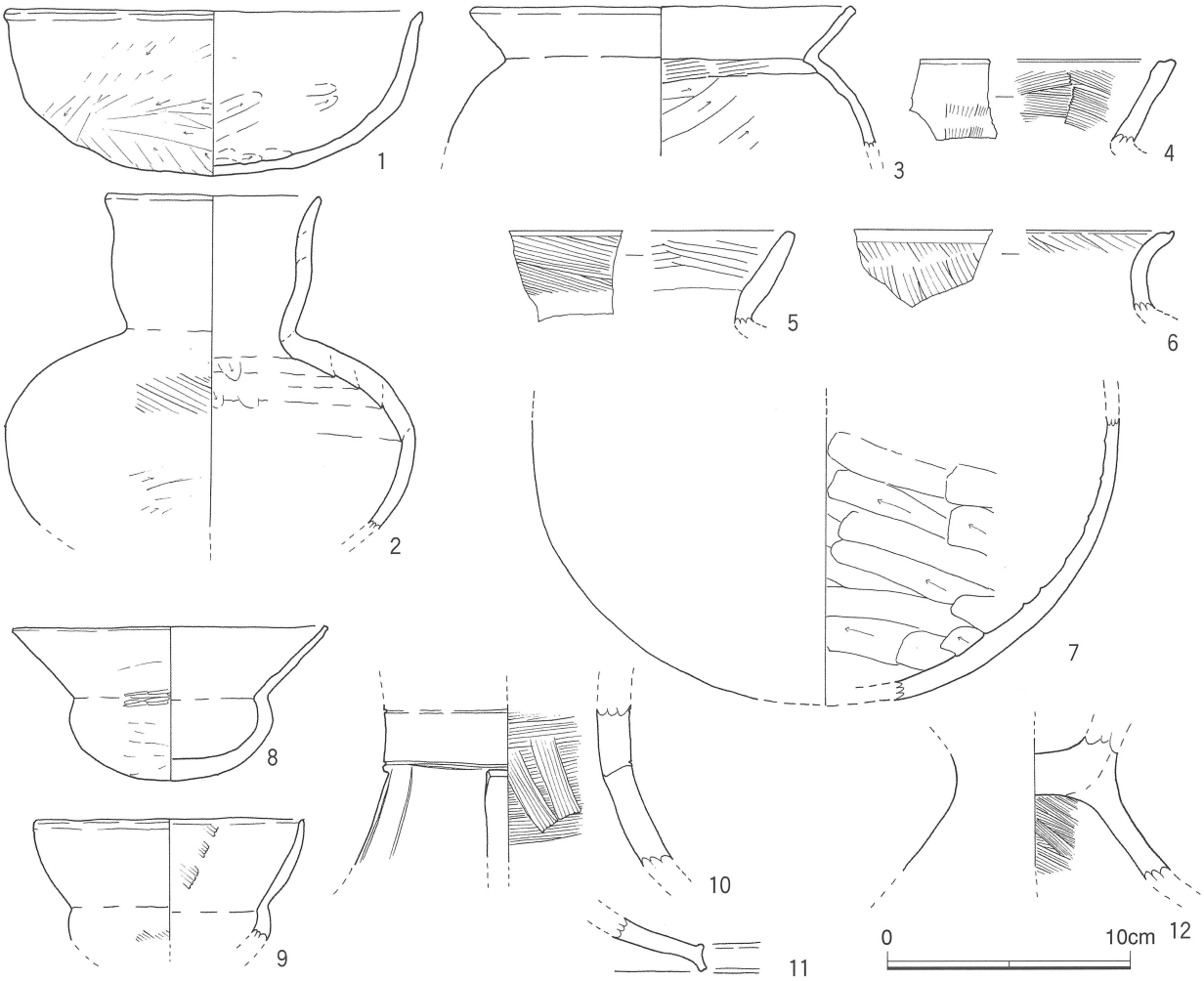
掘立柱建物（第７図）

掘立柱建物は17区から検出された。調査区西側未調査部分に柱穴が広がっていると想定される。梁行１間×桁行３間で主軸は東に11度傾く。南側には60cmほどの間隔で柱穴が続き，庇付建物と考えられる。柱間寸法は梁行2.05m，桁行2.05～2.30m（平均2.18m）である。柱穴の大きさは20cm～30cmで，深さは25cm，庇部分の柱穴のみ深さ40cmを測る。

第２節　遺構出土の遺物（図版10）

土坑覆土出土遺物（第８図１～12　第２表）

１は口縁部を少し反外させる土師器坏で，ほぼ完形に復元された。外面調整は底部を中心に長いスパンでヘラ削りを行い，中位以上には掌上で回転させながら細かくヘラ削りを行い，器壁を調整し，口縁部に横ナデを加える。深さのある均整のとれた形態である。２は土師器小型壺で40％ほどの接合資料である。内部の器面調整が甘く，粘土紐のつなぎ目が明瞭に残り，焼成も甘い。胴部中位が強く張り，直立する口縁部を呈する。３は土師器甕で，肩部位上の復元に成功したが，胴部以下の破片も存在する。胴部以下の破片外面には煤が付着し，口縁部付近には見られないため，煮炊きに用いられていたものと思われる。胴部中位付近では最も薄い部分で約0.3㎝を測り，内面のヘラ削り調整は丹念に行なわれている。覆土および16区出土品の接合資料。４は土師器甕口縁部片で，ほぼまっすぐ外反し，端部は水平に面取りされている。内外面とも横位の刷毛調整が行なわれるが，外面は横ナデが加えられ，端部のみは内外面とも横位の強いナデである。５は土師器甕口縁部片で，ほぼまっすぐ外反し，端部は断面方形になる。内面には単位の粗い刷毛調整，外面は細い刷毛調整である。頸部内面は横位の強いナデ調整がみられ，頸部のくびれの度合いは４よりも強い。６は土師器甕口縁部片で，丸く外反し，端部は水平に面取りされている。内外面とも斜位の刷毛調整である。７は土師器甕胴部片で，ほぼ丸い底に復元される。内面は横位に削り，器壁を整えており，最も薄い部分は胴部中位である。外面には刷毛調整のあとナデが加えられており，底部周辺から上位に煤の付着がみられる。８



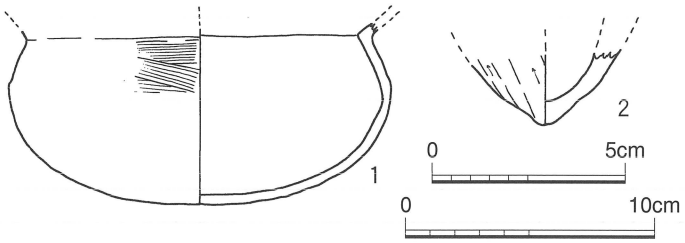
第８図　土坑出土遺物（１/３）

は土師器小型丸底土器（坩）で，70％近くに復元できた。覆土および16区出土品の接合で資料。直にのびる口縁部に丸い大部がつき，外面は丁寧にミガキ調整されている。非常に整った形態で，胎土は良く精製されており焼成も良好である。**9**は土師器小型丸底土器（坩）で，20％ほどの破片１点である。復元実測をこない，内外面ともに斜位の刷毛調整が行なわれ，内外面ともに横ナデにより仕上げられている。丸く膨らみながらのびる口縁部に丸い胴部を呈する。**10・11**は弥生時代後期から終末にかけてみられる器台である。中位以下に方形の透し孔を４方向に設ける。内外面ともに刷毛調整で，外面には沈線による区画線が施される。**12**は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて見られる台付甕の脚部片である。

住居跡出土遺物（第９図**1**～**2**）

1は小型丸底土器（鉢）で，口縁部は失われているが胴部はほぼ完形に復元できた。住居跡床面直上出土の原位置出土資料である。中位より上に最大径をもち，丸底である胴部は刷毛調整・ヘラ削りにより全体的に薄く仕上げられている。焼成は甘く，胎土に混入物を多く含み，もろい器壁である。

2は手捏土器の底部で，尖底を呈する。外面は底部から上方へ面取りが行なわれ，内面は丁寧なナデ調整である。焼成良好で非常に硬質である。住居跡覆土出土。



第９図　住居跡出土遺物（1/3・1/2）

図	番号	種別	法量（cm）		形態的特長	技法的特長		胎土／色調	備考
8	1	土師器 坏	高さ 口縁部径 深さ	6.8 16.8 6.3	口縁端部は短く外反 低部は平底に近い丸底	外面 内面	全体にヘラ削りを行い上半のみナデを加える 全体に指頭による強いナデ上半のみナデを加える	白色粒・雲母粒が多い角閃石も含む 赤く焼かれ内面は10YR 5/8，外面は少し明るい	精製された胎土焼成良好
	2	土師器 小型壺	残存高 口縁部径 胴部最大径	18.7 8.8 16.5	口縁部は直に立ち上がる胴部中位が極端に張る器壁は厚い	外面 内面	全体に斜め方向の刷毛調整、中位に横ナデを加え、以下は荒いヘラ削り 指頭による強いナデ	赤色砂が多くもろい 外面7.5YR 7/8 内面やや赤く5YR 7/8	粘土紐の接合が甘く、焼成も悪いためもろい
	3	土師器 甕	残存高 口縁部径 胴部径	6 15.4 16.2	口縁部は直に立ち上がる肩は張らない 胴部最大径は中位以上丸底である（破片観察）	外面 内面	縦方向の刷毛調整後、丁寧なナデ調整 口縁部は刷毛のあと横ナデ胴部は念入りなヘラ削り	石英などの白色粒・雲母粒を多く含む 内外面ともに5YR 6/6 内部は10YR 7/6	もっとも薄い部分で3ミリを測る
	4	土師器 甕	残存高	3.4	まっすぐに外反 端部水平面取り	内面 外面	横位の刷毛調整 縦位のは毛調整	角閃石・赤色砂・雲母 10YR 8/3	
	5	土師器 甕	残存高	3.7	まっすぐに外反 端部断面方形	内面 外面	横位の刷毛調整 横位の刷毛調整	白色砂・角閃石・雲母 7.5YR 6／4	白色砂目立つ
	6	土師器 甕	残存高	3.1	丸く外反 端部水平面取り	内面 外面	斜位の刷毛調整 斜位の刷毛調整	角閃石・赤色砂・白色砂 2.5YR 8/2	角閃石目立つ
	7	土師器 甕	残存高	11.4	丸底 やや長い胴部	内面 外面	入念なヘラ削り 刷毛調整後丁寧なナデ	白色砂・角閃石・雲母 10YR 7/2	もっとも薄い部分は中位
	8	土師器 坩	高さ 口縁部径 胴部最大径 口縁部高	6.3 12.8 8.2 3	直に伸びる口縁部は広く開き高い 最大径は胴部上位 胴部は球体で丸底	外面 内面	全面横方向を主体とするミガキ調整 胴部は不貞方向のナデ調整口縁部は横方向のナデ調整	生成された胎土で滑らかで、赤色砂を含む 内外面ともに7.5YR 5/6	完形近くに復元丁寧なつくり焼成良好
	9	土師器 坩	高さ 口縁部径 胴部最大径 （復元径）	5 11 8.2	外に張りながら立ち上がる口縁部で、端部は直立し丸い 胴部は丸く底部にかけて器壁が厚い	外面 内面	胴部下半に刷毛調整がみられ、全体はナデ調整で仕上 全体に細い刷毛調整が見られ、仕上げは横方向のナデ調整	白色粒・雲母粒・角閃石が多く，赤色砂も含む 内外面ともに5YR 7/6 内部は10YR 7/6	
	10～11	弥生土器 器台	残存高 中位径 11は脚裾部片	6.3 10	方形透かしを４方向に切り出す 沈線による区画	外面 内面	全体に縦方向の刷毛調整 中位付近は縦方向の刷毛調整中位以下は横方向の刷毛調整	白色粒・赤白砂・雲母粒・角閃石を多く含む 内面5YR 7/8，内面は少し明るい	
	12	弥生土器 台付甕 脚部片	残存高 接合部分径	5.4 6.4	脚部のしっかりした形態尖底平底となる底部へ脚部をつける	外面 内面	指頭によるナデ 低部はナデ脚部は刷毛調整	赤色砂・白色粒を含む 外面2.5YR 6/6 内面10YR 8/4	
9	1	土師器 鉢	残存高 胴部最大径	7 15	胴部最大径は中位以上深みがあり、口縁部は斜めに広がる様子	外面 内面	細かい横方向の刷毛調整 ヘラ削りを行い、中位以上に横ナデ調整を加える	白色粒・角閃石・赤色砂・雲母粒などの混入物 内外面ともに2.5YR 5/6	摩滅が激しく、器壁が薄くもろい

第２表　土坑・住居跡出土遺物観察表

第４章　遺　　物

第１節　旧石器時代の遺物（１）

後期旧石器時代に先行すると思われる石器群（第10図　図版15）

松尾遺跡で注目された石器のなかに，従来の後期旧石器時代や縄文時代のものとは明らかに様相を異にするものが検出された。その中でまず２点の周縁調整石器を取り上げる。これらの石器は以前斜軸尖頭器として紹介した経緯がある（川道・辻田2000）。

松尾遺跡から出土した周縁調整石器は２点である。１は産地不明の安山岩を素材とするもので，求心的な剥離を行う円盤状の石核から剥出したものらしい。平面形は台形状で，加撃軸と石器の長軸のなす角度は80度である。先端の角度は62度で尖鋭である。尖頭部の周辺調整は，剥片の端部に連続的に施すのではなく，わずかに間をあけて鋸歯状に丁寧に施している。２は風化面が白色になるサヌカイトを素材とし，基部側に自然面を残す。求心的な剥離を行う円盤状の石核から剥出したもので，平面形は台形状である。加撃軸と石器の長軸のなす角度は72度を測る。先端部のなす角度は83度である。尖頭部の調整は，左辺はやや大きめな調整剥離，右辺は細かいリタッチが施されている。

後期旧石器時代初頭石器群（第11図　図版16　巻頭カラー②）

松尾遺跡から出土した後期旧石器時代初頭に属すると思われる石器群は次のような内容である。

３は祖形のナイフ形石器と思われるものである。打瘤部を残す縦長状剥片の右側縁基部に粗い調整加工を施したもので，基部側が分厚く，先端部は薄くなる。先端部は尖鋭にならず両側縁が並行する。４・５は台形様石器である。４は横長剥片を素材とするもので，左側縁は節理面であり，また右側縁は折断されている。両側縁に調整加工は施されないものの，背面の稜線部分に平坦剥離が施され，厚さを減じる調整がなされている。５はやや縦長の不定形剥片を素材とし，両側縁とも節理面と思われ，調整加工は施されていない。背面には４と同じように横打による厚さを減じる調整が入る。また先端部に平坦剥離によって刃部が形成されている。６・７はスクレイパーである。６は折断面に抉入状の粗い調整加工が施されている。７は半裁しているものの両面から加工が施されており，両面加工石器ともよべるものである。８・10は彫器とした。８は小形の薄い縦長剥片の一端に数回のファシットが施されている。10は縦長剥片の一端に彫刀面をもつものの打面の調整はみられない。９は縦長の剥片で，８と接合する。11は寸詰まりの分厚い貝殻状の剥片である。背面には求心的な剥離痕がみられ，３のナイフ形石器が接合する。12は表面が著しく風化してトロトロしている。形態からみて小形の局部磨製石斧と思われる。基部の片方が大きく剥離している。リダクションと思われる痕跡も認められる。

使用された石材は，３・６・11は風化面が黒褐色を呈するガラス質の玄武岩で，いわゆる北松玄武岩とよばれるもので，その原産地は長崎県北部の福井洞穴周辺と思われる。４・７・８・９・10は，白色を呈する輝緑凝灰岩である。５・12は表面の風化が顕著で白色化しているが玄武岩である。

接合資料（巻頭カラー②）

①接合資料Ⅰ（第11図14・３＋11）

粗製のナイフ形石器と横長剥片が接合したもの。ナイフ形石器の素材となった縦長状剥片はたまたま縦長になったもので，剥片剥離技術の基調は求心的な横長剥離にあるものと思われる。

②接合資料Ⅱ（第11図13・８＋９）

小形の彫器６と縦長剥片８が接合したもの。この接合例や７の縦長剥片から当該期の剥片剥離技術に縦長剥片剥離技術が存在していたことは明らかである。

石器群の時期

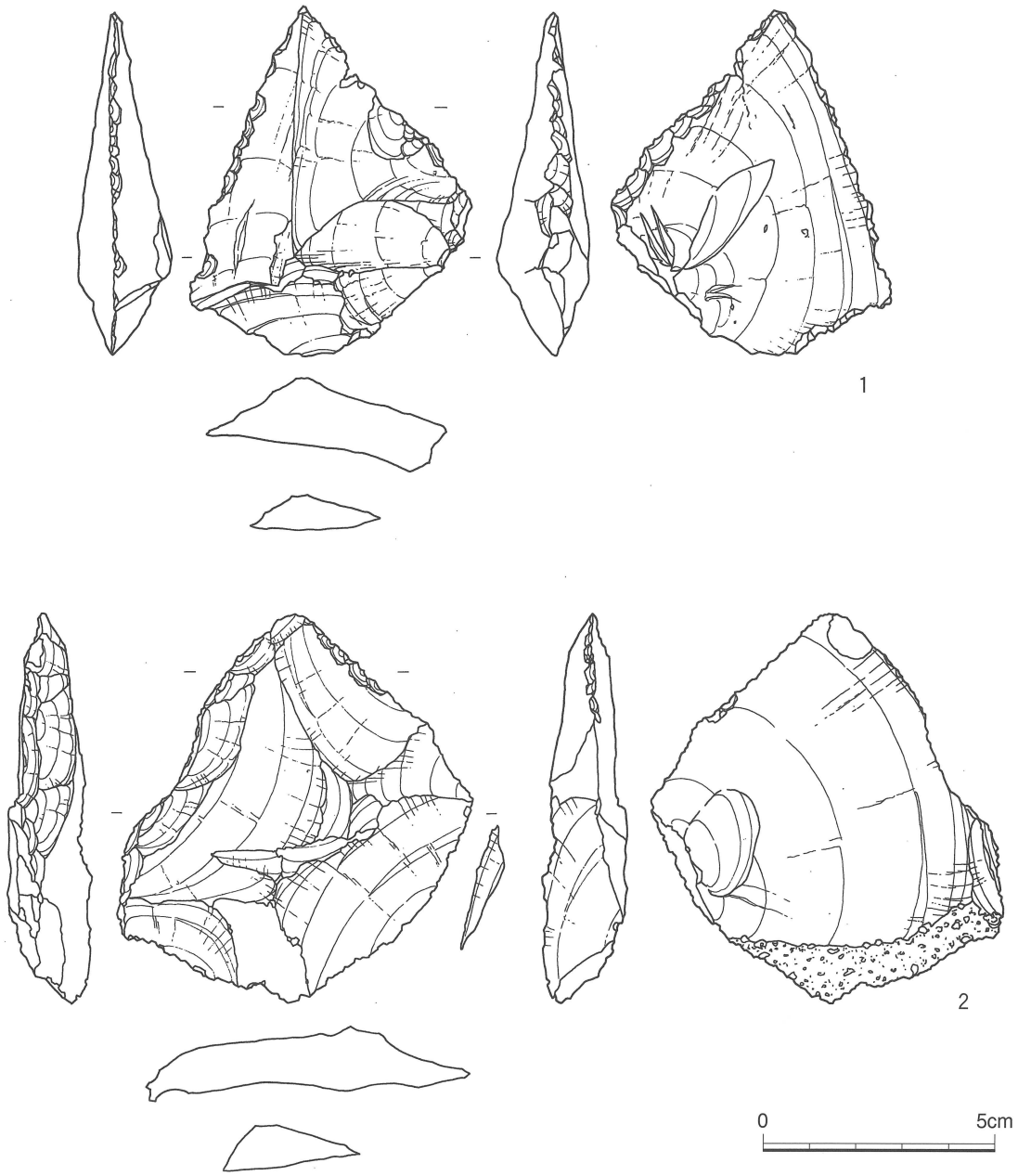
藤村新一氏による前期旧石器ねつ造事件は日本における該期の研究を白紙に戻してしまうものと言っても過言ではない。九州地方は藤村氏の関与が全く認められない地であり，中期旧石器時代研究でも学会に寄与するところは大きいと思われる。ところで本遺跡の２点の周縁調整石器（「斜軸尖頭器」）については，現在その存否についてさまざまな意見がある。「斜軸尖頭器」を後期旧石器時代や縄文時代の所産とすることで，石器自体が示準的な意味をもたないとする考え方もある（中川2001）。「斜軸尖頭器」が縄文時代早期の包含層から出土しており，縄文早期の石器であるという指摘もある（小田2001）。本資料を報告した時期は藤村氏の神通力が霊験あらたな時期に報告したものであり，東北を中心とする地域の資料を立論の根拠としたことは否めない事実である。

しかし果たして松尾遺跡の例を簡単に葬り去っていいものだろうか。中川の指摘する資料（中川2001）は後期旧石器時代から縄文時代の資料であるが，それらの素材は縦長剥片剥離技術によるものであるのに対し，本遺跡例は求心的な剥離技術である。素材となる剥片剥離技術におけるこの違いはきわめて大きいと思われる。また九州地方においては北九州市の辻田遺跡や熊本県下横田遺跡などにも類例がみられる。目を大陸に転じれば中国でも類似した資料が検出されている（加藤2000）。

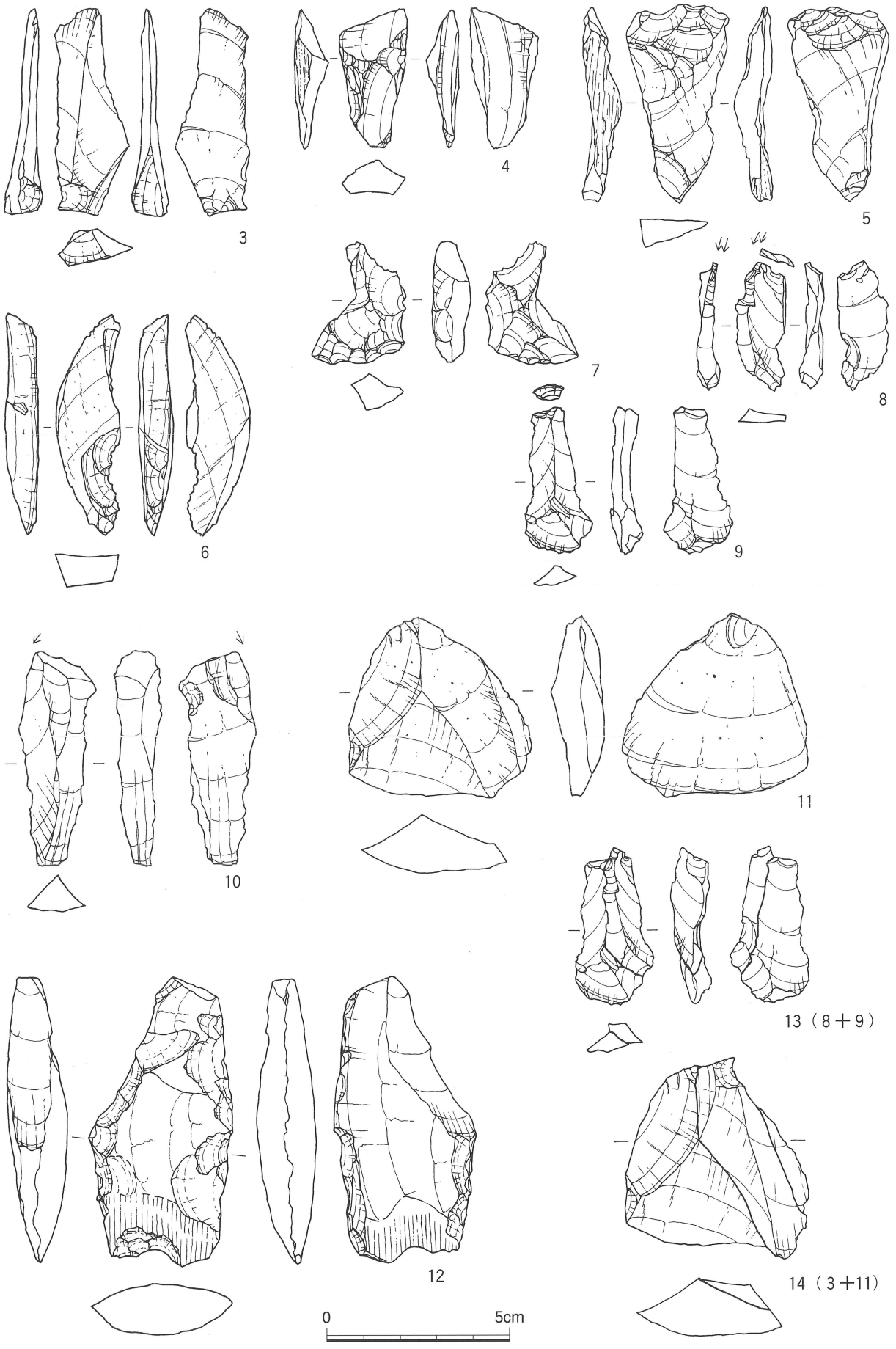
一方，周縁調整石器を除いた石器群は，台形様石器やナイフ形石器などを組成するところから，後期旧石器時代初頭に位置付けられるものと思われる。台形様石器は両側縁が折断面や節理面で加工されておらず，背面の稜線部分に平坦剥離が施されている。類例には熊本県曲野遺跡・同県石の本遺跡・同県下横田遺跡などをあげることができるが，それらの例はいずれも側縁の加工が顕著であり，松尾遺跡との違いが指摘できる。また下横田遺跡とは石材も共通する。これらの石器群は近年熊本県を中心に発見例が相次いでおり，島原半島でも原位置を保った石器群が検出されるのも時間の問題であろう。

図	番号	器　種	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
10	1	周縁調整石器	安山岩	74.0	62.0	20.0	51.3	
	2	周縁調整石器	安山岩	82.0	77.0	18.0	76.4	
11	3	ナイフ形石器	サヌカイト	55.0	20.0	10.0	6.0	基部加工ナイフ・11と接合
	4	台形様石器	凝灰岩	37.0	18.0	9.0	4.4	左側縁節理面・右側縁切断面
	5	スクレイパー	玄武岩	52.0	27.0	8.0	9.9	
	6	スクレイパー	サヌカイト	57.0	16.0	9.0	9.3	
	7	スクレイパー	凝灰岩	32.0	25.0	10.0	5.3	熊本県緑川水系石材
	8	彫器	凝灰岩	34.0	14.0	4.0	1.8	熊本県緑川水系石材
	9	剥片	凝灰岩	39.0	19.0	7.0	3.2	８と接合・熊本県緑川水系産石材
	10	彫器	凝灰岩	57.0	20.0	13.0	9.9	
	11	剥片	サヌカイト	49.0	49.0	14.0	24.9	
	12	局部磨製石斧	玄武岩	77.0	38.2	16.0	48.0	風化が著しい
	13			42.0	21.0	11.0	5.0	接合資料８＋９
	14			54.0	49.0	17.0	15.9	接合資料３＋11

第３表　旧石器時代遺物計測表①



第10図　旧石器時代の石器①（2/3）



第11図　旧石器時代の石器②（2/3）

第２節　旧石器時代の遺物（２）（図版18）

（１）の遺物と同じく縄文時代早期の遺物と混在するかたちで検出されている。今回の概報ではトゥールのみ報告する。

ナイフ形石器（第12図13～18）

13，14は国府型ナイフである。どちらも翼状剥片を素材とし，主に打面側の裏面からブランティング加工を行なっている。また，刃部側の基部にも裏面から細かいブランティング加工を行ない２側縁加工としている。**13**はサヌカイト，**14**は青灰色黒曜石製である。**15**はやや厚めの横長剥片を素材とし，打面側の裏面から大きめの剥離を行なう。また，刃部側の基部にも大きく粗いは剥離を行なう。石材は安山岩である。**16，17**は縦長剥片を素材とし２側縁加工を行なういわゆる九州型ナイフ形石器である。**16**は乳白色黒曜石，**17**は青灰色黒曜石製である。**18**は縦長剥片を素材とし，打面を残したまま基部側裏面両側縁から細かい剥離を行ない，右側縁上方に裏面からブランティング加工を施す。また，刃部には裏面よりノッチ状の加工が見られる。

切出形石器（第12図19～25）

19～25は熊本県狸谷遺跡に特徴的に見られる切出形石器いわゆる「狸谷型ナイフ形石器」に類する資料である。**19**はやや厚手の横長剥片を素材とし，打面側を長側縁として裏面から細かい剥離を行ない，反対側の短側縁は裏面からの細かい剥離により内湾状を呈する。また，左側縁には上部より先行する縦方向の剥離が確認できる。石材は青灰色黒曜石である。**20**は先端部を欠損するが19と同様である。表面は右側より平坦剥離を行なう。また，右側縁には下部より先行する縦方向の剥離が確認できる。石材は青灰色黒曜石である。**21**は20と同様で表面右側からの平坦剥離も確認できる。19・20のような長側縁の縦方向の剥離は確認できない。石材は青灰色黒曜石である。**22**は大きく粗い剥離で両側縁を作り出している。石材は安山岩である。**23**は厚手の素材を用いており，表面の右側からの平坦剥離が顕著である。また，右側縁には上部より縦方向の剥離が確認できる。石材は黒色黒曜石である。**24**は礫面を残す薄い素材を用い，細かい剥離によって両側縁を作り出している。石材は安山岩である。**25**はこれまでのものと逆で打面側が内湾状を呈する短側縁である。厚手の素材を用いており，表面左側からの平坦剥離が顕著である。石材は安山岩である。

台形石器（第12図26）

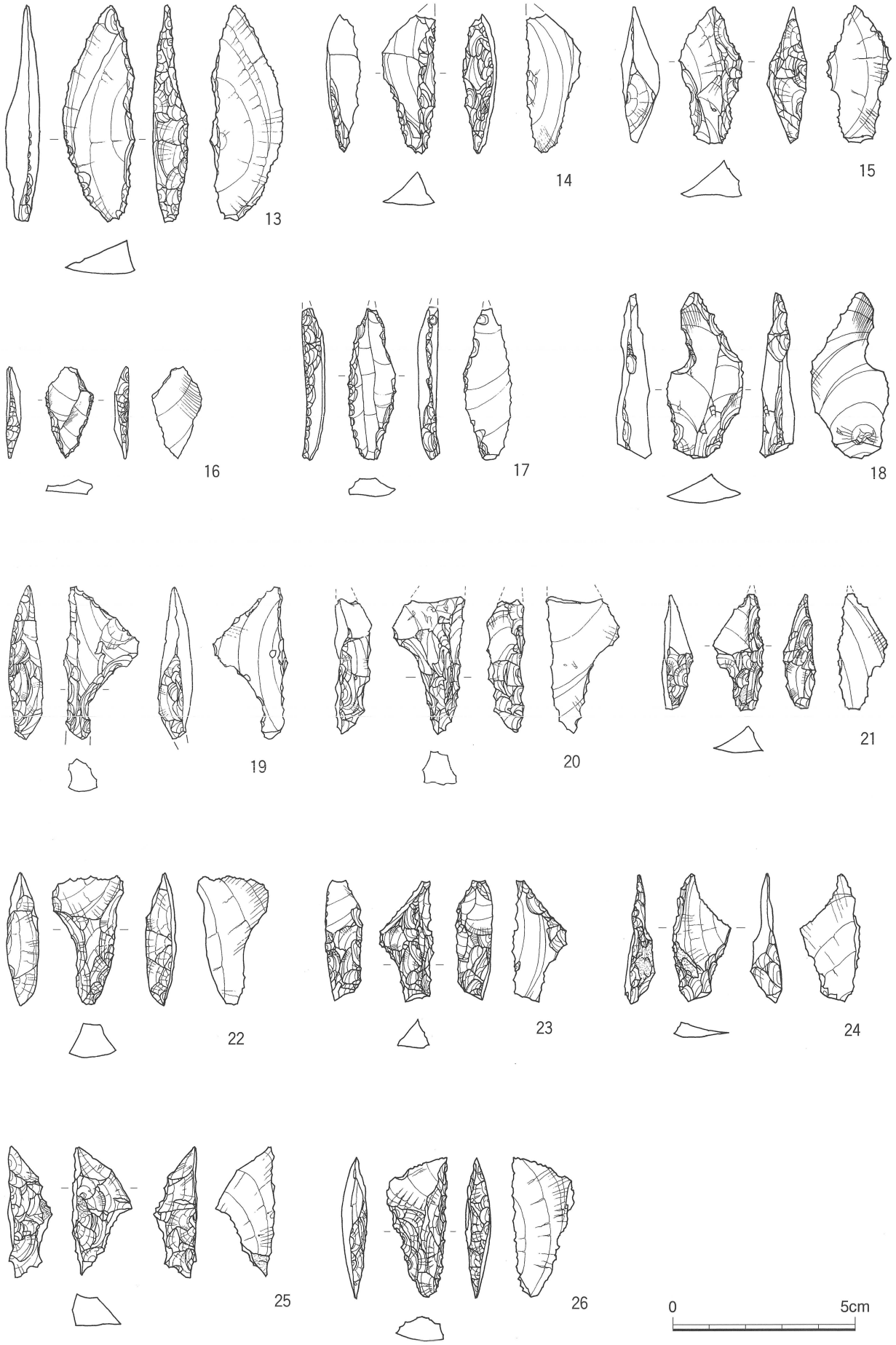
26は薄手の横長剥片を素材とし，左側縁は平坦剥離，右側縁は平坦剥離後細かいブランティングによって成形している。石材は玄武岩である。

尖頭器（第13図27～30）

27は剥片尖頭器で，厚い縦長の剥片を素材とする。先端部は欠損し基部側は折断し打面を除去している。左側縁は先端部付近まで大きな剥離がはいり，右側縁は大きな剥離により基部側を内湾状に仕上げ先端付近は素材剥片の辺縁を刃部とする。石材はサヌカイトである。**28**は三面加工尖頭器で，表面は稜上から左右交互に調整剥離がおこなわれ，裏面は，先端部は左側から細かい調整剥離，それ以外は右側から大きな調整剥離が行なわれている。先端部及び基部は礫面が残っている。石材は黒曜石である。**29**も三面加工尖頭器で，表面の左側縁は裏面から，右側縁基部側も裏面から，先端部付近は稜上から調整剥離後裏面から調整剥離を行ない整形している。裏面は基部側の右側から３回のみ調整剥離を行なう。石材はサヌカイトである。**30**も三面加工尖頭器で，表面は稜上から左右交互に調整剥離がおこなわれ，裏面は，両側縁からの調整剥離である。石材はサヌカイトである。

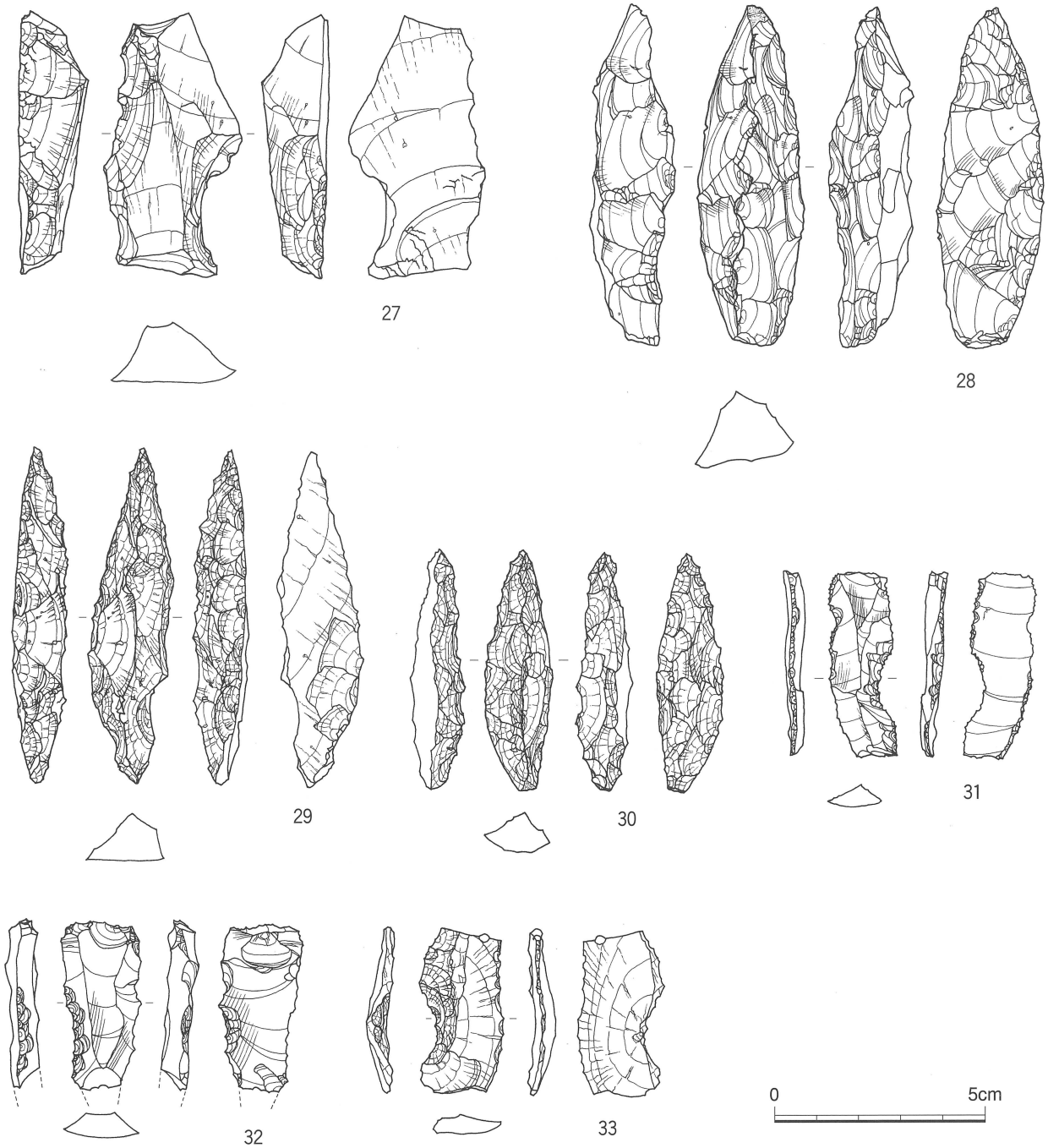
ノッチ（第13図31～33）

31は薄い縦長剥片を素材とし，上下は折断されている。右側縁の裏面から数回の剥離によってノッ



第12図　旧石器時代の石器③（2／3）

チ状に作り出している。それ以外の部分は両側縁とも細かい剥離によってスクレイパー状を呈す。石材は黒色黒曜石である。**32**はやや厚手の縦長の剥片を素材として，右側縁の表面から数度の剥離によってノッチ状に作り出している。また，左側縁にはスクレイパー状の加工を有する。石材は黒色黒曜石である。**33**は薄い横長の剥片を素材とし，上下は切断されている。打面から表面に向かって数回の剥離によってノッチ状に作り出している。右側縁は細かい剥離によりスクレイパー状を呈する。石材は安山岩である。



第13図　旧石器時代の石器④（2/3）

図	番号	器　種	石　質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備　考
12	13	ナイフ形石器	サヌカイト	49.0	20.0	9.0	8.0	国府形ナイフ
	14	ナイフ形石器	青灰色黒曜石	38.0	14.5	9.5	3.4	国府形ナイフ・先端部折れ
	15	ナイフ形石器	安山岩	37.5	17.5	10.5	4.4	
	16	ナイフ形石器	乳白色黒曜石	24.5	13.0	4.0	1.0	
	17	ナイフ形石器	青灰色黒曜石	41.0	14.0	6.0	2.9	先端部折れ
	18	ナイフ形石器	黒曜石	45.0	21.0	9.0	4.9	基部加工ナイフ・刃部にノッチ
	19	切出形石器	灰黒色黒曜石	42.0	21.0	10.0	4.4	
	20	切出形石器	青灰色黒曜石	37.5	20.0	10.5	5.5	先端部折れ
	21	切出形石器	青灰色黒曜石	31.5	13.0	8.5	2.1	
	22	切出形石器	安山岩	34.5	19.5	8.5	4.1	
	23	切出形石器	黒曜石	32.5	15.0	10.5	3.4	基部折れ
	24	切出形石器	安山岩	34.5	16.0	8.5	2.4	
	25	切出形石器	安山岩	35.0	16.0	11.5	4.3	
	26	台形様石器	玄武岩	38.0	16.5	7.0	3.4	
13	27	剥片尖頭器	サヌカイト	61.5	32.0	15.5	25.2	先端部折れ・基部切断
	28	三面加工尖頭器	黒曜石	79.5	25.5	20.0	31.4	先端部・基部礫面残存
	29	三面加工尖頭器	サヌカイト	78.0	20.5	8.0	16.0	
	30	三面加工尖頭器	サヌカイト	55.5	16.0	14.0	8.6	
	31	ノッチ	黒曜石	43.5	17.0	5.5	3.0	右側縁スクレイパー・上下切断
	32	ノッチ	黒曜石	39.5	19.5	9.0	4.8	左側縁スクレイパー・下部折れ
	33	ノッチ	安山岩	39.0	20.5	7.0	3.5	右側縁スクレイパー・上下切断

第４表　旧石器時代遺物計測表②

第３節　縄文時代早期及びその他の土器（図版３．４．５．６．７．８）

今回の概報では，比較的文様及び器形のはっきりした87点を図示した。

縄文時代早期土器群（１～81）

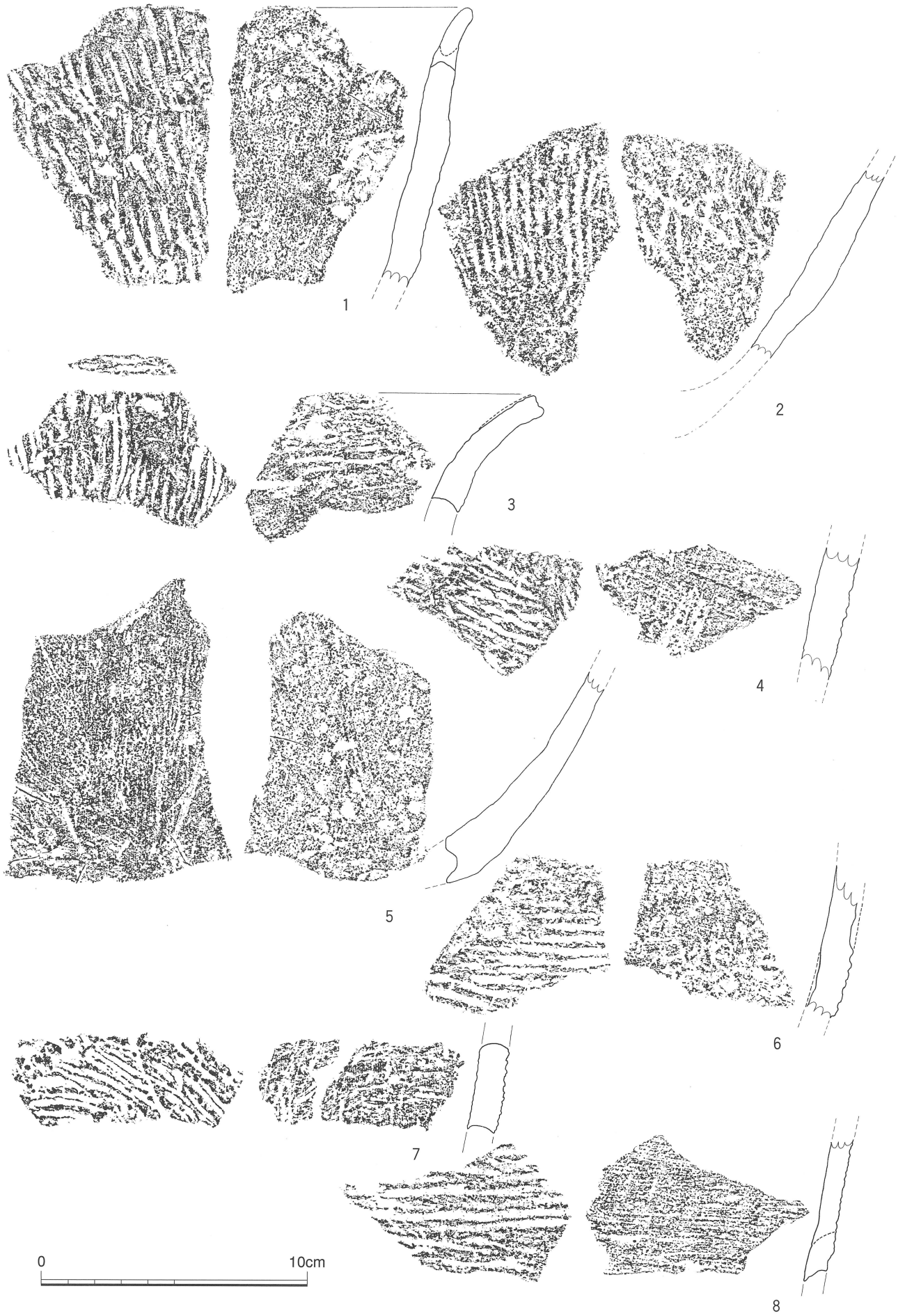
１～８（図版３）は条痕文系土器群である。全体に器壁が厚く，やや重たい感じの土器群である。条痕はいずれも粗い施文である。１は胴部から口縁部にかけての資料で，口縁部がやや外反する。外面は粗い条痕を短いストロークで縦位に数度に分けて施文する。器面調整は内外面ともナデである。補修孔を穿つ。２は尖底深鉢の底部直上部分である。外面には粗い条痕を縦位に施文する。外面の器面調整はナデである。３は口縁部で大きく外反する。外面には粗い縦位の条痕を施文し，内面にも横位の粗い条痕を施文する。また，口唇部にも条痕状の施文が見られる。１と同タイプと考えられる。器面調整は内外面ともナデである。４は胴部破片で斜位の粗い条痕を施文する。器面調整は外面がナデ，内面がヘラ状工具によるナデである。５は丸底に近い尖底深鉢の底部直上部分で，緩やかに開きながら立ち上がる。内外面とも無文だが，外面にはササラ状の工具による器面調整が見られる。６は胴部破片で，外面に横位の条痕を施文する。７は胴部破片で，外面に斜位の粗い条痕を施文する。器面調整は外面がナデ，内面がヘラ状工具によるナデである。８は胴部破片で，外面に横位の条痕を施文する。６と同タイプと考えられ，一野式とも考えられる。

９～33（図版４．５）は押型文土器群である。おおむね田村式段階（９～28）と，手向山式段階（29～33）と捉えておきたい。９は口縁部で緩やかに外反する。外面は斜位の山形押型文，内面は口縁部に原体条痕を施文し，その下に横位の山形押型文を施文する。内面の山形押型文帯の幅は原体長を示すものと思われる。10も口縁部で緩やかに外反する。外面は粗大な楕円押型文，内面は斜走する７条

の沈線を施文する。器面調整は内外面ともナデで，外面の押型文は平坦化している。**11**も口縁部で緩やかに外反する。外面は横位の楕円押型文を施文するが，器壁が風化し拓影がはっきりしない。内面は口縁部に楕円押型文を施文する。内面の楕円押型文帯の幅が原体長を示すものと思われる。外面の器面調整はナデである。**12**も口縁部であまり外反せず直線的に開く。外面は横位の楕円押型文を施文し，内面は口縁部に原体長幅分と考えられる横位の楕円押型文を施文する。また，口唇部内面には刻目を付す。器面調整は内外面ともナデである。**13**も口縁部で，口縁付近で強く屈曲し外反する。内外面に横位の楕円押型文を施文するが，内面は風化し拓影がはっきりしない。外面の器面調整はナデである。**14**も口縁部で緩やかに外反する。外面は横位の楕円押型文を施文する。内面は口縁部に原体長幅分と考えられる横位の楕円押型文を施文する。口縁部は部分的に薄く仕上げられ，先細り状を呈する。内面の器面調整はナデである。**15**も口縁部で緩やかに外反する。外面は横位の楕円押型文を施文し，内面は口縁部に原体条痕と思われる施文がある。**16**も口縁部であまり外反しない。外面は縦位の，内面は横位の原体条痕を施文する。器面調整は内外面ともナデである。口唇部には丸棒状施文具による押圧の刻目を付す。**17**も口縁部で外内面とも横位の楕円押型文を施文する。**18**も口縁部で緩やかに外反する。外面は横位の楕円押型文を施文し，口縁部内面は２回に分けて原体条痕を施文する。内外面とも器面は風化しており拓影がはっきりしない。**19**も口縁部で緩やかに外反している。外内面とも粗大な横位の楕円押型文を施文する。口縁部内面の楕円はナデ調整により押し潰され平坦になっている。拓影はないが，口唇部にも楕円の押型文を付す。**20**も口縁部で緩やかに外反する。外面は粗大な横位の楕円押型文を施文する。内面は横位の山形押型文を２回施文する。山形文の頂部が対向するように施文されており，菱形押型文のように見える。手向山式の祖形の一種と考えられる。拓影は無いが，口唇部にも楕円の押型文を付す。器面調整は内外面ともナデである。**21**も口縁部で緩やかに外反する。外面は縦位の粗大な楕円押型文を施文する。口縁部内面は２回に分けて原体条痕を施文する。口唇部には押圧による刻目を付す。器面調整は内外面ともナデである。**22**も口縁部で，外面は粗大な横位の楕円押型文を施文する。内面は横位の山形押型文を施文する。拓影は無いが，口唇部にも楕円の押型文を付す。器面調整は内外面ともナデである。**23**も口縁部で，外面は粗大な横位の楕円押型文を施文する。内面は横位の山形押型文を施文する。拓影は無いが，口唇部にも楕円の押型文を付す。器面調整は内外面ともナデである。20・22・23は同一個体と予想される。**24**は胴部で緩やかに内湾気味に立ち上がる。外面には斜位の山形押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**25**は口縁部直下部分で，内外面に横位の楕円押型文を施文する。**26**は胴部で，外面は粗大な楕円押型文を横位に施文する。内面の拓影に見える白い斑点は指頭圧痕である。**27**は胴部で，外面は横位の楕円押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**28**は底部で，外面は斜位の山形押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**29**は手向山式の屈曲部と考えられ，外面は粗大な横位の楕円押型文を施文する。**30**は胴部で外面に細かい斜位の山形押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。江迎町・広久保遺跡で出土している手向山式に酷似しており，胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。**31**は胴部で外面に菱形押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。**32**は口縁部直下と考えられ，緩やかに外反する。外面は縦位の菱形押型文，内面は横位の菱形押型文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。30・31と同じく胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。**33**は胴部で外面に縦位の菱形押型文を施文する。31・32に比べると菱形押型文の大きさが約半分と細かい。器面調整は内外面ともナデである。

34～**79**（図版６．７．８）はいわゆる塞ノ神・平栫式土器群で，新東晃一氏の設定する，平栫様式の石坂上式及び栫ノ原式と捉えておきたい。**34**は緩やかな波状を呈する口縁部で，強く屈曲して外反す

る。波頂部は肥厚させて内面に短沈線を施文する。外面は３条の沈線を単位に口縁部及び屈曲部に施文する。**35**の口縁部も緩やかな波状を呈し，波頂部には短沈線を施文する。外面は３条の沈線を単位に口縁部端・口縁部及び屈曲部に施文する。また，拓影ははっきりしないが，胴部には縦位の撚糸文帯を施文する。内面にはヘラ状工具による器面調整痕が見られる。**36**は緩やかな波状を呈する口縁部と思われ，口縁付近で強く屈曲して外反する。外面は３条の沈線を単位に口縁部及び屈曲部に施文する。器面調整は内外面ともナデである。**37**も口縁部で，外面には横位と斜位，内面には横位の沈線が施文され，文様は内外面とも原体条痕による施文と考えられる。器面調整は内外面ともナデであろう。**38**は口縁部でゆるい屈曲部を持つ。外面は屈曲部に３条を単位の横位の沈線を施文する。内外面とも器面調整はナデである。**39**は口縁部で口唇部直下にゆるい屈曲部を持つ。外面の口唇部直下の屈曲部とその下に,3条を単位の横位の沈線を施文する。内外面とも器面調整はナデである。**40**は緩やかに外反する口縁部で，口唇部直下に１条の円形刺突その下位には貝殻腹縁によると思われる長方形の連続刺突を施す。**41**は垂直に立ち上がる口縁部で，口唇部外端はやや張り出し気味である。**42**も垂直に立ち上がる口縁部で,66～70と同一タイプと見受けられる。外面に櫛歯状施文具による条線，沈線，爪形文といった特徴的な文様を施文し，外面ナデ，内面条痕ナデ消しの器面調整を施す。**43**は内側に大きく「く」字型に屈曲するいわゆる「２重口縁」で，外面には沈線と刺突文の文様を施文し，屈曲部外面には刻目を付す。**44**は同じく内側に「く」字型に強く屈曲する２重口縁で口唇部に刻目を付す。外面には沈線と刺突文の文様を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**45**も同じく内側に「く」字型に強く屈曲する２重口縁で口唇部には刻目を付す。外面口唇部刻み目直下には，横走する２本の沈線の間に２列単位の刺突文を充填させる。また，屈曲部外面にも刺突文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**46**も同じく「く」字型に屈曲する２重口縁で口唇部には刻目を付す。外面は沈線・刺突文を施文し，口唇部直下の刺突文帯は弧状をなすようである。また，屈曲部外面には刻目を付す。器面調整は外面がナデ，内面がヘラ状工具によるナデである。**47**も内側に「く」字型に強く屈曲する２重口縁で口唇部に刻目を付す。外面には沈線を３条施文し，屈曲部には刻目を付す。器面調整は内外面ともナデである。**48**は内側に「く」字型に強く屈曲する２重口縁の屈曲部分である。外面は横走する沈線，及び曲線文で区画した中に刺突文を充填施文する。器面調整は内外面ともナデである。**49**は胴部から口縁部にかけての屈曲部で，外面に５条の横走する沈線，及び縦位の撚糸文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**50**は胴部から口縁部にかけての屈曲部で，口唇部を欠くが，緩やかな波状口縁と思われる。外面には屈曲部に３条を単位としたゆるい波状の沈線を横走施文し，胴部は縦位の撚糸文・刺突文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**51**は39・63と同一タイプと思われる。外面には３条を単位の横走する沈線を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**52**は胴部から口縁部にかけての屈曲部で，外面には３条を単位とした沈線を横走施文し，曲線部分で180度方向を変えてさらに施文する。胴部には縦位の「Ｓ」字状結節で無文部を挟んで２条ずつ施文する。撚糸原体は１段であろう。**53**も胴部から口縁部にかけての屈曲部で，外面の屈曲部に３条を単位とした沈線を横走施文し，胴部には縦位の撚糸文で無文部を挟んで施文する。器面調整は内外面ともナデである。**54**は胴部で外面に縦位の撚糸文で無文部を挟んで施文する。器面調整は外にナデ，内面に丁寧なナデを施す。**55**は胴部で外面に縦位の撚糸文で無文部を挟んで施文する。その後４条を単位とした沈線を横走施文する。器面調整は外面がナデ，内面がヘラ状工具によるナデである。**56**は胴部で，外面に縦位の撚糸文で無文部を挟んで施文する。その後４条を単位とした沈線を横走施文する。**57**は胴部で，外面に縦位の撚糸文で無文部を挟んで４条施文する。器面調整は内外面ともにナデであろう。**58**は胴部で，外面に縦位の撚糸文で無文部を挟んで施文する。その後３条を単位とした沈線を



第14図　縄文時代の土器①（1／2）

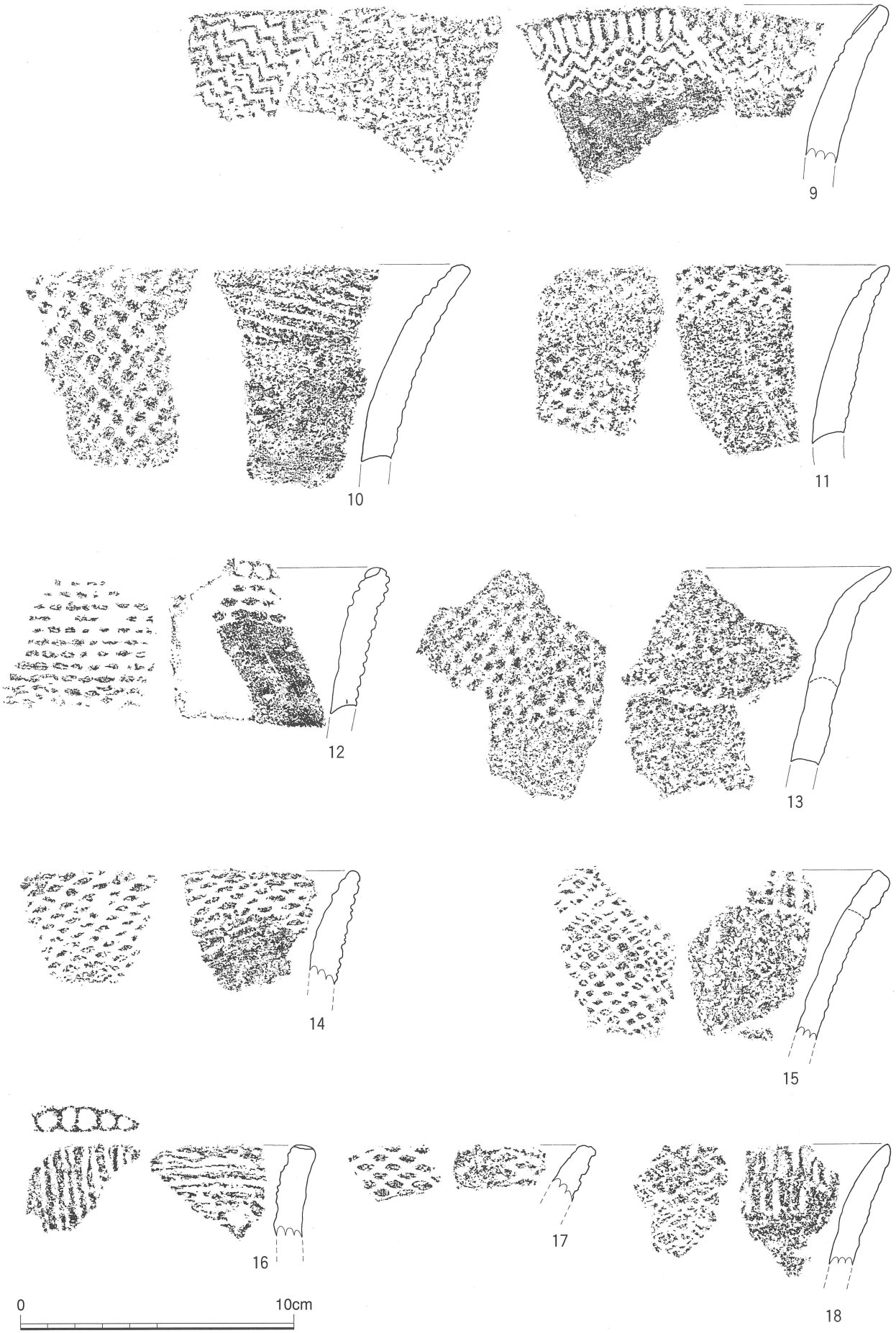
３列横走施文する。器面調整は外面がナデ，内面はヘラ状工具によるナデである。**59**は55と同一個体と予想される。外面は縦位の撚糸で無文部を挟んで施文する。器面調整は内外面ともナデである。**60**は胴部で，外面に横位の沈線と横位・縦位の刺突文を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**61**は胴部で外面に縦位の撚糸を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**62**は胴部で外面に横位・斜位の沈線が施文され，器面調整は内外面ともナデであるが，外面は丁寧に施されている。**63**は10，17と同一タイプと思われる。外面には３条を単位の横走する沈線を施文する。器面調整は内外面ともナデである。**64**は胴部で外面に３条を単位の沈線・曲線文を施文する。器面調整は外面がナデである。**65**は器形不明であるが胴部であろう。外面に３条を単位の弧状の沈線を施文する。**66～70**は同一固体と予想される。外面に櫛歯状施文具による縦位・斜位の平行沈線・条線を施文する。器面調整は外面がナデ，内面がヘラ状工具によるナデである。**71**は弓なり状の上げ底になる底部片で，器面調整は内外面ともナデである。**72**は上げ底になる底部片で，外面に縦位の撚糸で無文部を挟んで施文する。器面調整はナデである。**73**はかるく上げ底になる底部片で，外面に縦位の撚糸が施文される。**74**は壺形土器の口縁部で５条の微隆起線が確認できる。器面調整は内外面ともにナデであり，微隆起線の間は丁寧にナデられている。**75**は壺形土器の肩部で６条の微隆起線が整然と確認できる。微隆起線には約４㎜間隔で刻目を施す。器面調整は内外面ともにナデであり，微隆起線の間は丁寧にナデられている。**76**は壺形土器の肩部で３条を単位とする微隆起線が２列確認できる。微隆起線には約４㎜間隔で刻目を施す。器面調整は内外面ともにナデであり，微隆起線の間は丁寧にナデられている。**77**は壺形土器の肩部で４条の微隆起線が確認できる。また，微隆起線帯の下には櫛歯状施文具による波状文を施文する。器面調整は内外面ともにナデであり，微隆起線の間は丁寧にナデられている。胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。**78**は壺形土器の肩部で外面には微隆起線（剥落），櫛歯状施文具による波状文が施文される。器面調整は内外面ともにナデであり，微隆起線の間は丁寧にナデられている。胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。**79**も壺形土器と予想される。外面には櫛歯状施文具による波状文が施されている。器面調整は内外面ともにナデである。胎土には空隙が多く繊維土器の可能性がある。77・78・79は同一個体であろう。**80**は耳栓で外径9.6㎝を測るリング状である。外面の上部と下部に三角形に張り出している。器面調整は全体にナデである。**81**も耳栓で上面文様帯径5.4㎝，下面部径5.8㎝を図る凹面を呈する円盤状である。上面文様帯は内面と外面にわかれるが，どちらも３条の刺突文を単位として中心から放射状に施文する。器面調整は全体にナデである。また，上部文様帯の一部には赤色顔料が付着している。

その他の土器（第20図82～87　図版９）

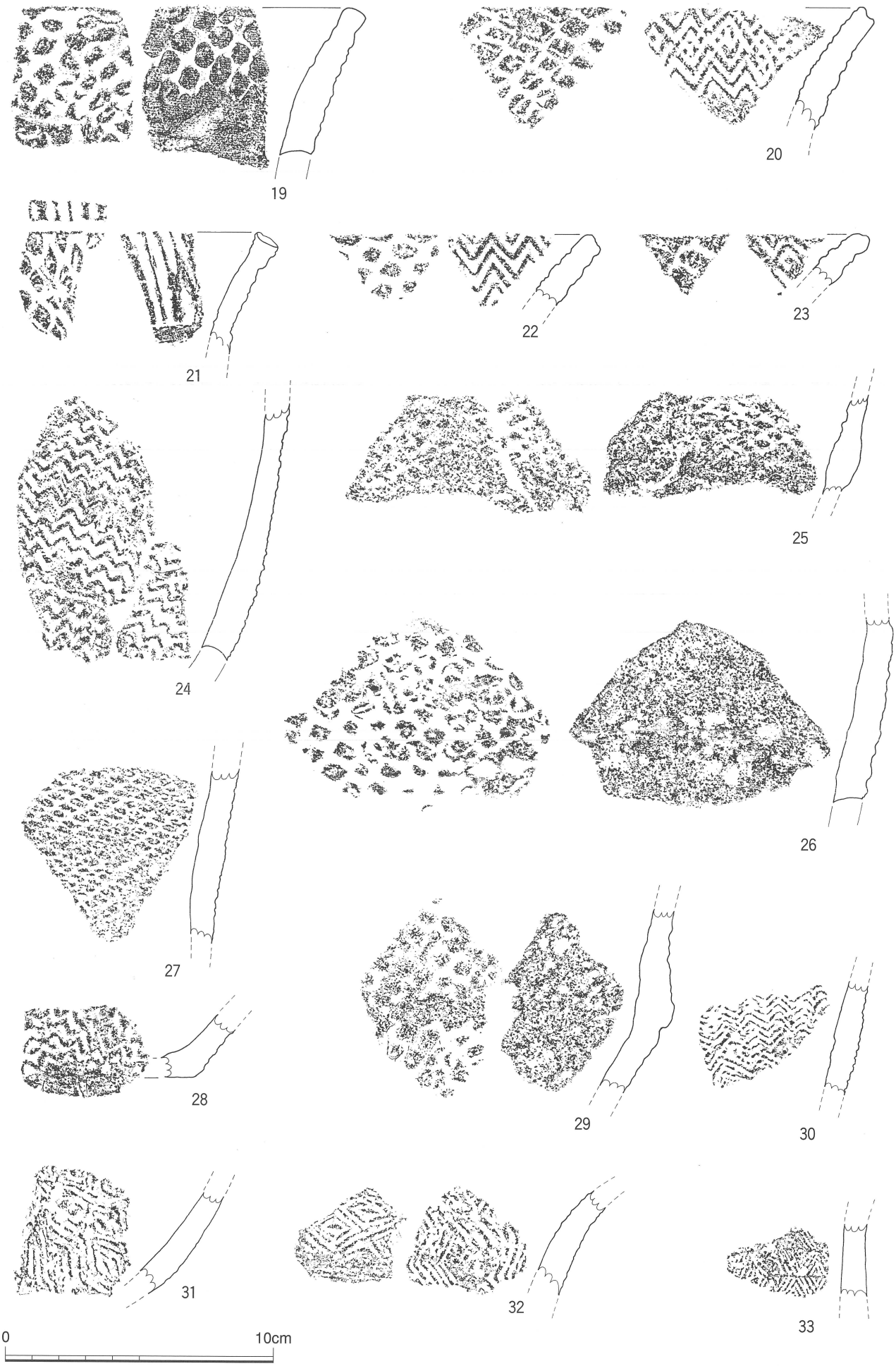
82は晩期の粗製深鉢の底部である。**83**は晩期の粗製深鉢の底部で器面調整は外面がヘラ状工具によるナデ，内面がナデである。

84は須恵器坏蓋片で，比較的稜線が太くしっかりしており，深みのある形態に復元され，**85**の身に対応するものと思われる。**85**は須恵器杯身で，九州須恵器編年Ｉｂ期後半と考えられる。立ち上がりから受け部にかけてはヨコナデ，体部外面は回転を利用したヘラ削り，体部外面下半のヘラ削り痕はナデによって稜線が甘くなる。体部内面には粘土紐の凹凸がある。**86**は須恵器甕の胴部片で，胴部の張りが強い点が特徴であり，九州須恵器編年Ｉｂ期後半頃と考えられる。胴部最大径となる部分に施文し，中央に小刀状の鋭利な工具で外側から円孔を穿孔している。胴部内面は回転を利用した横ナデにより調整される。

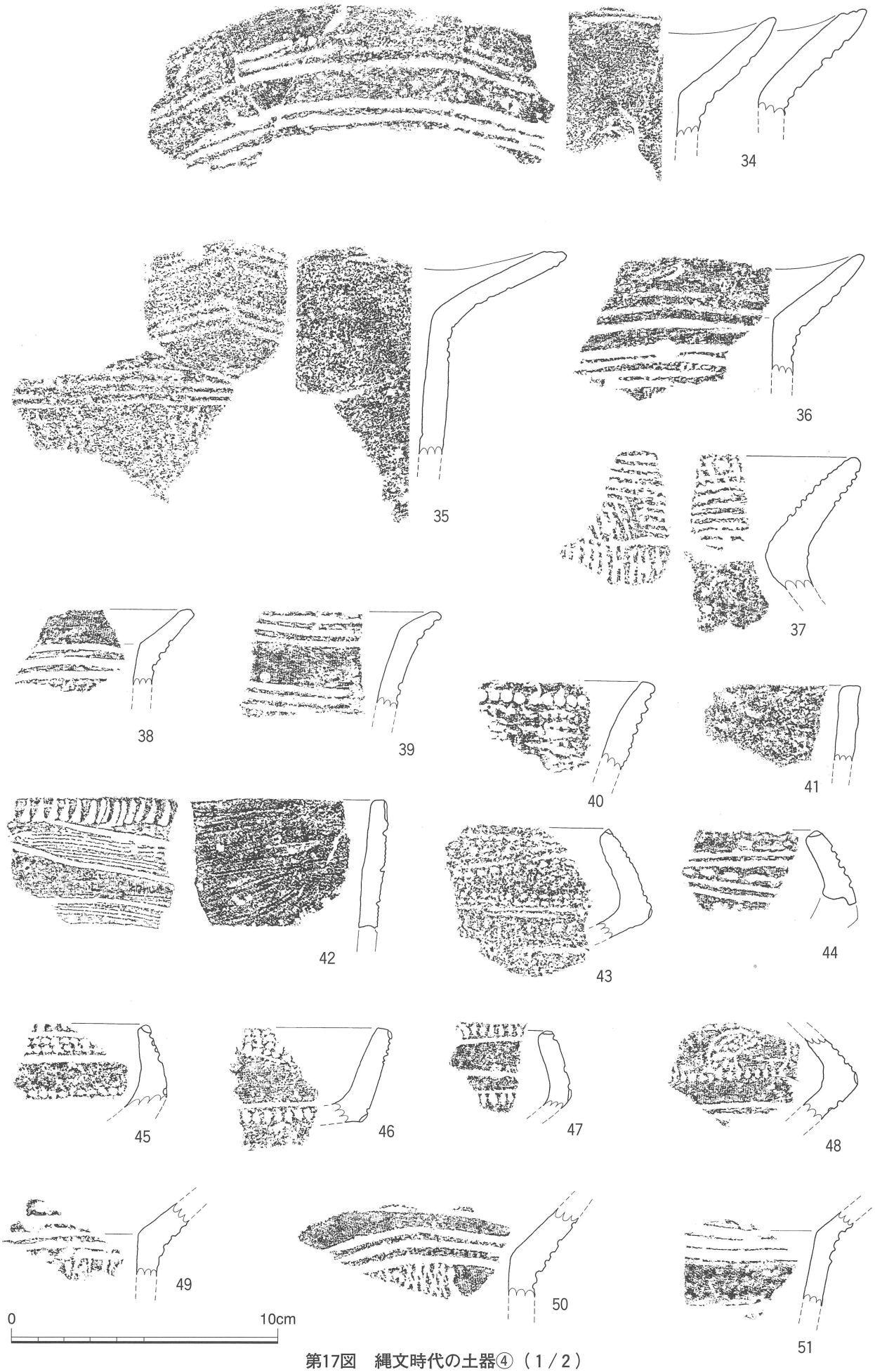
87は全体に磨耗しているが桶巻造りで奈良時代の平瓦である。外面に格子目文（タタキ）が施文されている。



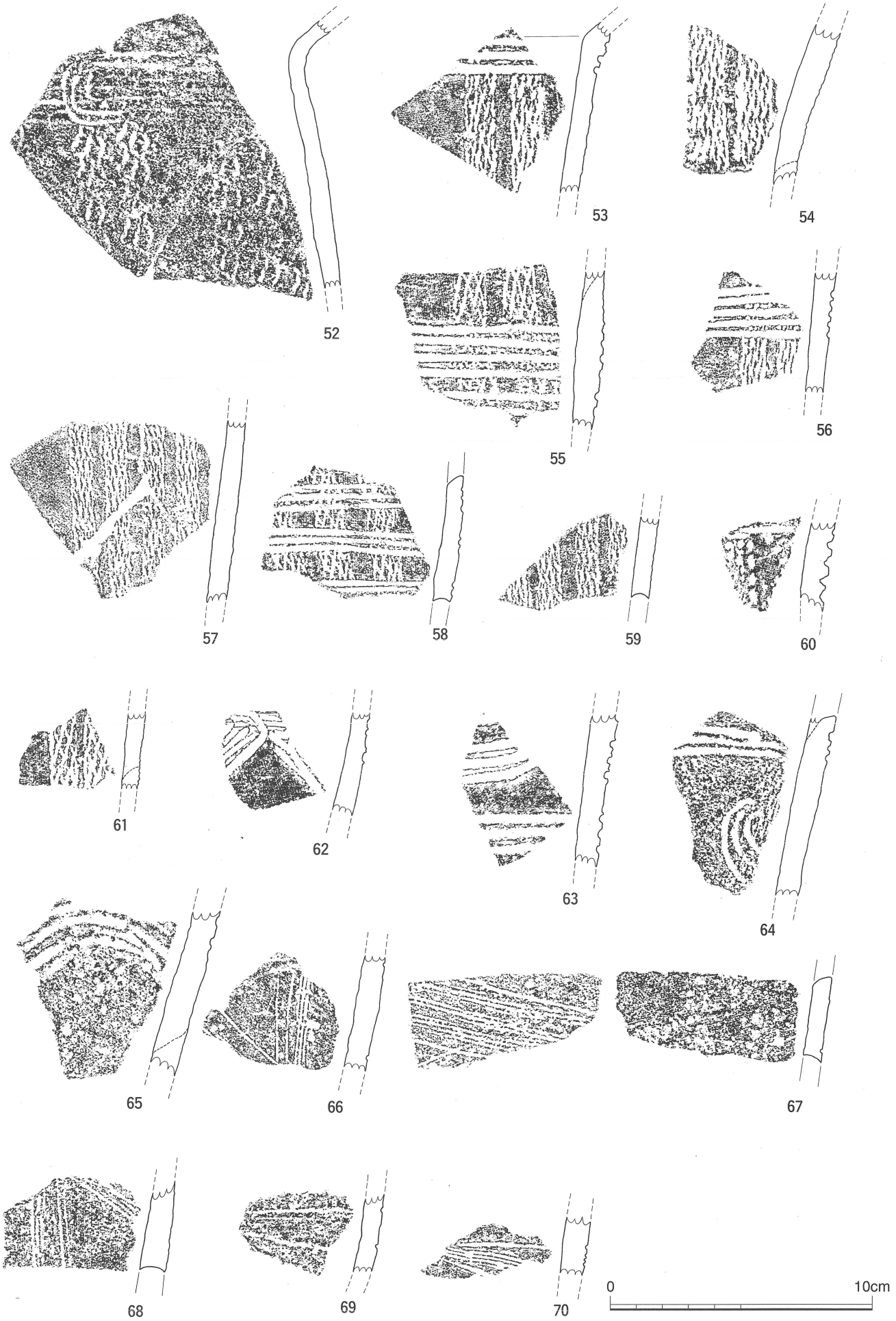
第15図　縄文時代の土器②（1／2）



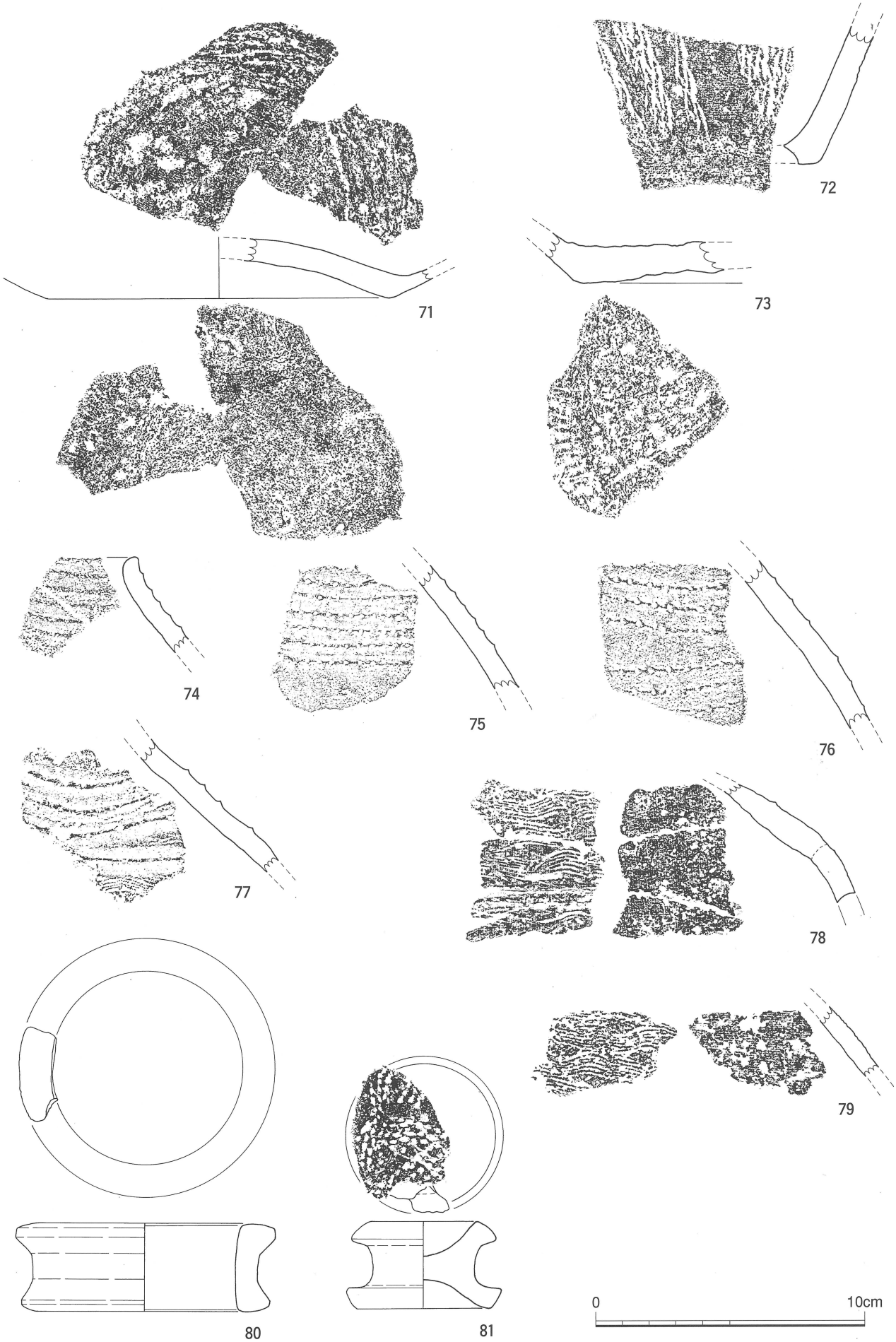
第16図　縄文時代の土器③（1／2）



第17図　縄文時代の土器④（1／2）



第18図　縄文時代の土器⑤（1／2）



第19図　縄文時代の土器⑥（1／2）

図	番号	色調 外面	色調 内面	胎土	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
14	1	暗橙褐色	暗茶褐色	石英・角閃石・白色粒子	粗い条痕（原体条痕か？）	なし	ナデ	ナデ	
	2	暗橙褐色	暗黄褐色	石英・角閃石・白色粒子・黒曜石	縦位の条痕	なし	ナデ	器面荒れ	尖底深鉢の底部直上部位
	3	暗褐色～黄白色	暗褐色～黄白色	石英・角閃石	縦位の粗い条痕	横位の粗い条痕	ナデ	ナデ？	口唇部に条痕状の施文
	4	黄褐色	黄灰褐色	石英・角閃石	斜位の粗い条痕（押型？）	なし	ナデ	ヘラ状工具によるナデ	
	5	暗黄褐色	淡褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	なし	なし	ササラ状工具による条痕	器面荒れ	丸底に近い尖底深鉢の底部直上部片
	6	暗褐色	灰褐色	石英・白色粒子・角閃石	沈線	なし	ナデ	器面荒れ	
	7	暗赤褐色～橙褐色	淡褐色	石英・角閃石	粗い条痕	なし	軽いナデ	ヘラ状工具によるナデ	
	8	淡灰褐色	黒灰色	石英・白色粒子	横位の沈線（または条痕）	なし	器面荒れ	器面荒れ	一野式か？茶園遺跡の土器に類似している
15	9	淡茶褐色	暗橙褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	斜位の山形押型文	横位の山形押型文、原体条痕	器面荒れ	ナデ	器面は風化が著しい
	10	暗黄褐色	暗褐色	石英・白色粒子・角閃石	粗大な楕円押型文	沈線	ナデ	ナデ	口縁部内面にやや斜走する７条の沈線を施文
	11	暗褐色～暗黒褐色	暗褐色	石英・角閃石・白色粒子	楕円押型文	楕円押型文	ナデ	器面荒れ	口縁部片
	12	暗黄褐色	黄褐色～暗黄褐色	石英・白色粒子・角閃石	楕円押型文	楕円押型文	ナデ	ナデ	口唇部に刻目
	13	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子・石英・角閃石・黒曜石	楕円押型文	楕円押型文？	器面荒れ	器面荒れ	胎土に多量の白色を含むため、色調は斑状を呈する
	14	暗橙褐色	暗橙褐色	石英・角閃石	楕円押型文	楕円押型文	ナデ？	ナデ	口縁部は部分的に薄く仕上げられ、先細り状を呈する
	15	淡橙褐色	淡橙褐色～灰褐色	石英・白色粒子	楕円押型文	原体条痕？	ナデ？	器面荒れ	
	16	暗赤褐色	暗黄褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	縦位の原体条痕？	横位の原体条痕？	ナデ	ナデ	口唇部には丸棒状施文具による刻目を施文
	17	暗灰褐色	黄褐色	石英・角閃石	楕円押型文	楕円押型文	ナデ	器面荒れ	
	18	淡黄褐色	暗褐色	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	楕円押型文	原体条痕	器面荒れ	器面荒れ	内面の原体条痕は２回に分けて施文
16	19	淡橙褐色	淡橙褐色	石英・角閃石	粗大な楕円押型文	粗大な楕円押型文	ナデ	ナデ	楕円は調整により押し潰されている。田村式
	20	黄褐色	暗黄褐色	石英・角閃石・白色粒子	粗大な楕円押型文	山形押型文	ナデ	ナデ	No.22・23と同一個体か。山形のを対向するように施文しているため菱形押型文のような文様効果がある。手向山式に近い段階の田村式か。
	21	淡黄褐色～灰色	淡黄褐色～灰色	石英・白色粒子	粗大な楕円押型文	原体条痕	ナデ	ナデ	原体条痕は２回に分けて施文。口唇部に刻目。田村式
	22	黄褐色～暗褐色	暗黄褐色	石英・角閃石・白色粒子	粗大な楕円押型文	山形押型文	ナデ	ナデ	
	23	淡黄褐色	淡黄褐色	石英・角閃石	粗大な楕円押型文	山形押型文	ナデ	ナデ	口唇部施文
	24	淡橙褐色	暗褐色	石英・角閃石	斜位の山形押型文	なし	ナデ？	ナデ	
	25	橙褐色	暗褐色	石英・角閃石・白色粒子	楕円押型文	楕円押型文	器面荒れ	ナデ	口唇部直下の破片
	26	淡黄褐色	暗黄褐色	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	粗大な楕円押型文	なし	ナデ	指頭圧痕	外面文様は、部分的に押し潰されている
	27	暗赤褐色	暗褐色～灰褐色	石英・赤色粒子・角閃石	楕円押型文	なし	ナデ	器面荒れ	
	28	橙褐色	暗褐色	石英	斜位の山形押型文	なし	ナデ	ナデ	弘法原式か
	29	暗赤褐色	暗褐色	石英・角閃石・白色粒子	粗大な楕円押型文	なし	器面荒れ	器面荒れ	手向山式の屈曲部
	30	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	特になし	細かい斜位の山形押型文	なし	ナデ	ナデ	江迎町・広久保遺跡の手向山式に酷似している。胎土には空隙が多い（繊維土器か？）
	31	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	特になし	斜位の菱形押型文	なし	ナデ	ナデ	胎土には空隙が多い（繊維土器か？）
	32	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	特になし	縦位の菱形押型文	横位の菱形押型文	ナデ	ナデ	口縁部直下か？胎土には空隙が多い。繊維土器か
	33	淡黄褐色	黒灰色	特になし	縦位の菱形押型文	なし	ナデ	ナデ	胎土には空隙が多い。繊維土器か
17	34	淡橙褐色～淡黄褐色	淡橙褐色～淡黄褐色	石英・白色粒子・赤色粒子・角閃石	横位の沈線	なし	器面荒れ	ナデ	緩やかな波状口縁。波頂部は肥厚させて短沈線を施文
	35	淡褐色	暗黄褐色	石英・角閃石・白色粒子	縦位の撚糸？、沈線	なし	器面荒れ	ヘラ状工具によるナデ	緩やかな波状口縁。波頂部は肥厚させて短沈線を施文
	36	淡橙褐色	淡褐色	石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子	沈線	なし	ナデ	ナデ	緩い波状口縁
	37	橙褐色	暗褐色	石英・白色粒子・角閃石	横位／斜位の沈線	横位の沈線	ナデ？	ナデ？	内外面とも、文様は原体条痕か
	38	淡黄白色	淡黄白色	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	沈線	なし	ナデ	ナデ	
	39	暗赤褐色	暗褐色	石英・角閃石・金雲母？	横位の沈線	なし	ナデ	ナデ	口縁部片と思われるが不明瞭。No.51,62,63と同一タイプか

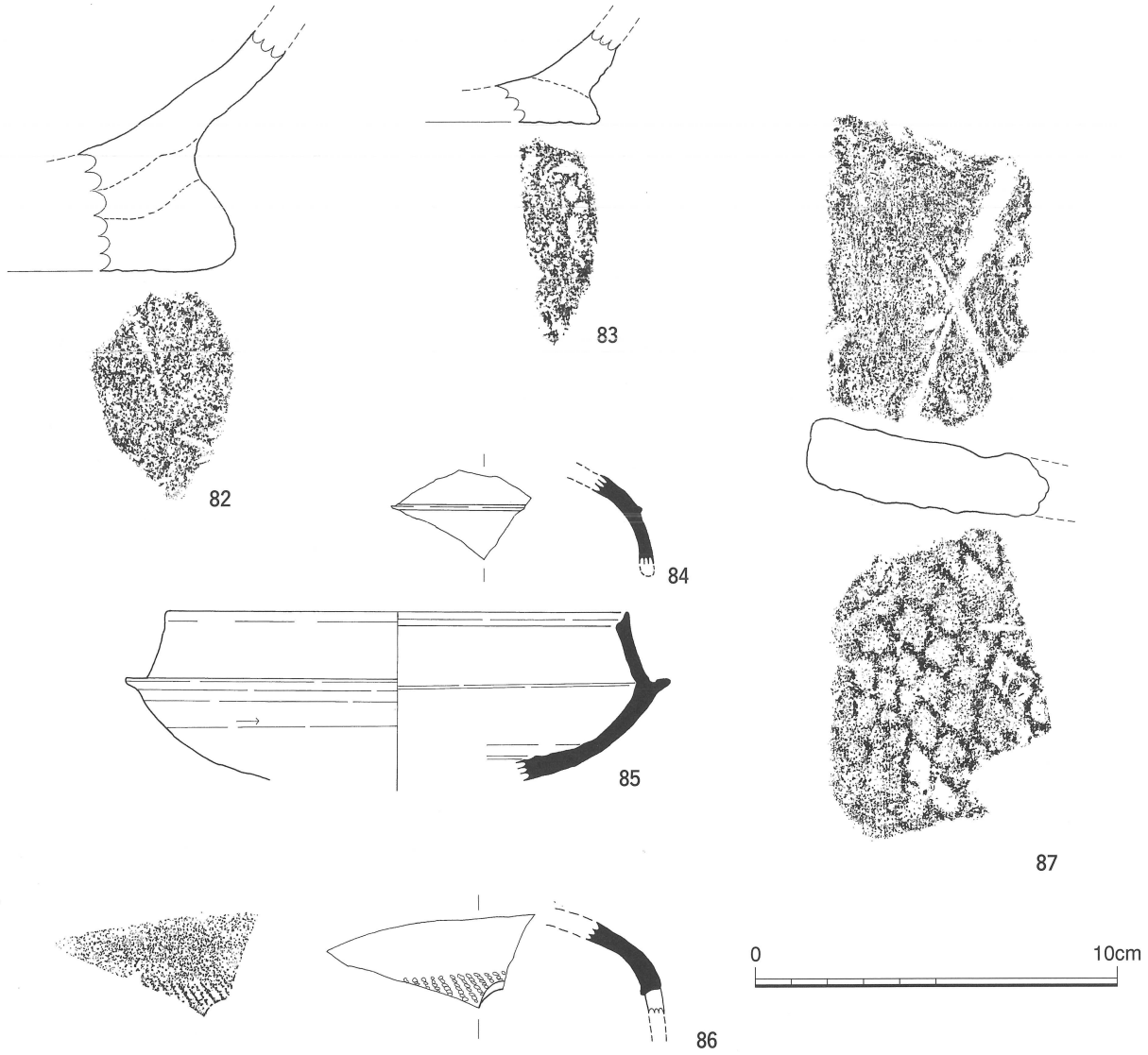
第５表　土器観察表①（早期）

図	番号	色調 外面	色調 内面	胎土	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
17	40	淡黄灰色	淡黄灰色	石英	刺突	なし	ナデ	ナデ？	口唇部直下に一条の円形刺突、その下位には貝殻腹縁によると思われる長方形の連続刺突を施す
	41	淡褐色	暗赤褐色～淡褐色	石英・白色粒子・角閃石	不明	なし	器面荒れ	器面荒れ	口唇部外端は、やや張り出し気味
	42	暗橙褐色	橙褐色	石英・角閃石・白色粒子	櫛歯状の条、沈線、爪形文	なし	ナデ	条痕ナデ消し	No.66,67,68,70と同一タイプか
	43	淡橙褐色～暗褐色	淡黄白色	石英・白色粒子・角閃石	沈線・刺突	なし	器面荒れ	器面荒れ	「く」字形に屈曲する口縁部片。石坂上式
	44	橙褐色	橙褐色	石英・角閃石	沈線、刺突（短沈線）	なし	ナデ	ナデ	「く」字形に強く屈曲する口縁部片。口唇部刻目
	45	淡褐色～淡黄色	淡褐色～淡黄色	石英・角閃石・黒曜石	刺突、沈線	なし	ナデ	ナデ	口唇部に刻目。強く内湾する口縁部片。石坂上式
	46	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	石英・角閃石	横位・斜位の沈線、刺突	なし	ナデ	ヘラ状工具によるナデ	口縁部と思われるが不明瞭。刺突文の施文具は貝殻か
	47	淡黄灰色	淡灰褐色	石英・角閃石・白色粒子	沈線、刺突（刻目）	なし	ナデ	ナデ	口唇部刻目
	48	淡黄褐色	淡黄褐色	石英・角閃石	横位の沈線、曲線、刺突	なし	ナデ	ナデ	「く」字形に屈曲する口縁部片。石坂上式
	49	淡褐色	淡褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	沈線、縦位の撚糸	なし	ナデ	ナデ	
	50	淡橙褐色	淡黄褐色	石英・角閃石	撚糸、刺突、緩い波状の横走線	なし	ナデ	ナデ	口唇部を欠くが、緩やかな波状口縁と思われる
	51	淡橙褐色	淡橙褐色	石英・角閃石	横位の沈線	なし	ナデ	ナデ	
18	52	暗茶褐色～暗黒褐色	暗茶褐色～暗黒褐色	石英・角閃石・白色粒子	沈線・曲線・「S」字状結節	なし	器面荒れ	器面荒れ	
	53	暗茶褐色	暗黒褐色	石英・角閃石・白色粒子	沈線・縦位の撚糸	なし	ナデ	ナデ	
	54	淡褐色	淡黄褐色	石英・角閃石・黒曜石	縦位の撚糸	なし	ナデ	丁寧なナデ	
	55	淡赤褐色	淡赤褐色	石英・赤色粒子・角閃石	縦位の撚糸→沈線	なし	ナデ	ヘラ状工具によるナデ	
	56	暗黒褐色	淡褐色～暗黒褐色	石英・角閃石	沈線・縦位の撚糸	なし	ナデ	器面荒れ	
	57	淡黄灰色	淡黄灰色	石英・角閃石	縦位の撚糸	なし	ナデ	ナデ？	
	58	淡茶褐色	淡灰褐色	石英・角閃石・白色粒子	沈線・縦位の撚糸	なし	ナデ	ヘラ状工具によるナデ	
	59	淡黄灰色	淡黄灰色	石英・角閃石	縦位の撚糸	なし	ナデ	ナデ	No.55と同一個体か
	60	暗褐色	暗褐色	石英	横位の沈線、横位／縦位の刺突文	なし	ナデ	ナデ	
	61	淡黄褐色	淡黄褐色	石英・角閃石	縦位の撚糸	なし	ナデ	ナデ	
	62	灰褐色	淡黄白色	石英・角閃石	横位／斜位の沈線	なし	丁寧なナデ	ナデ	
	63	淡黄褐色	暗灰褐色	石英・角閃石	横位の沈線	なし	ナデ	ナデ	
	64	淡褐色～淡灰褐色	淡褐色～暗茶褐色	石英・角閃石	沈線、曲線文	なし	ナデ	器面荒れ	
	65	暗橙褐色	暗灰褐色	石英・白色粒子・角閃石	弧状の沈線	なし	器面荒れ	器面荒れ	器形不明
	66	暗赤褐色	暗赤褐色	石英・白色粒子	縦位／斜位の平行沈線	なし	ナデ？	ヘラ状工具によるナデ	No.66,67,68,69,70と同一個体か
	67	暗赤褐色	暗橙褐色	石英・白色粒子・角閃石	沈線、条線	なし	ナデ	条痕ナデ消し？	
	68	暗赤褐色	暗赤褐色	石英・白色粒子・雲母・黒曜石	縦位／斜位の平行沈線	なし	ナデ？	条痕ナデ消し？	
	69	暗赤褐色	暗褐色	石英・白色粒子・角閃石・黒曜石	沈線	なし	器面荒れ	器面荒れ	
	70	暗赤褐色	暗赤褐色	石英・白色粒子・角閃石・金雲母	沈線、条線	なし	ナデ	ナデ	
19	71	淡橙褐色	暗褐色	石英・角閃石・黒曜石	なし	ナデ	ナデ	ナデ	弓なり状の上げ底になる底部片
	72	橙褐色	橙褐色	石英・角閃石・赤色粒子	縦位の撚糸	なし	ナデ	器面荒れ	上げ底になる底部片
	73	橙褐色	橙褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	縦位の撚糸	なし	器面荒れ	器面荒れ	かるく上げ底になる底部片
	74	黄橙色	黄橙色	石英・白色粒子・角閃石	微隆起線	なし	ナデ	ナデ	壺形土器口縁部
	75	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・白色粒子・角閃石	微隆起線／刻目	なし	ナデ	ナデ	壺形土器肩部
	76	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・白色粒子・角閃石	微隆起線／刻目	なし	ナデ	ナデ	壺形土器肩部
	77	暗赤褐色	暗赤褐色～暗赤灰色	特になし	微隆起線／波状文	なし	ナデ	ナデ	壷形土器の肩部。胎土には空隙が多い
	78	暗赤褐色	暗赤褐色～暗赤灰色	特になし	微隆起線（剥落）、波状文	なし	ナデ	ナデ	壷形土器の肩部。胎土には空隙が多い
	79	暗赤褐色	暗褐色	特になし	櫛歯状施文具による波状文	なし	ナデ	ナデ	壷形土器。胎土には空隙が多い
	80	黄橙色	黄橙色	石英・白色粒子・角閃石	なし	なし	ナデ	ナデ	リング状の耳栓
	81	黄橙色	黄橙色	石英・白色粒子・角閃石	刺突文	刺突文	ナデ	ナデ	円盤状の耳栓

第6表　土器観察表②（早期）

図	番号	色調		胎土	文様		器面調整		備考
		外面	内面		外面	内面	外面	内面	
20	82	淡灰褐色	淡黄褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	なし	なし	器面荒れ	器面荒れ	晩期・粗製深鉢の底部片
	83	暗黄褐色	暗赤褐色	石英・赤色粒子・白色粒子・角閃石	なし	なし	ヘラ状工具によるナデ	ナデ	晩期・粗製深鉢の底部片
	84	灰白色	灰色	石英粒・黒色粒	なし	なし	ナデ	ナデ	5世紀後半～6世紀前半の須恵器坏蓋
	85	灰色～暗灰色	青灰色	砂粒（石英）	なし	なし	ナデ	ナデ	5世紀後半～6世紀前半の須恵器坏身
	86	灰白色	青灰色	石英粒	刺突	なし	ナデ	ナデ	5世紀後半～6世紀前半の須恵器甕
	87	灰白色	灰白色	石英・角閃石	格子目文（タタキ）	なし	器面荒れ	器面荒れ	全体に摩耗。桶巻造りで、奈良時代の平瓦か

第7表　土器観察表③（その他の土器）



第20図　その他の土器（1/2）

第４節　縄文時代の石器

石　　鏃（１～27　図版11）

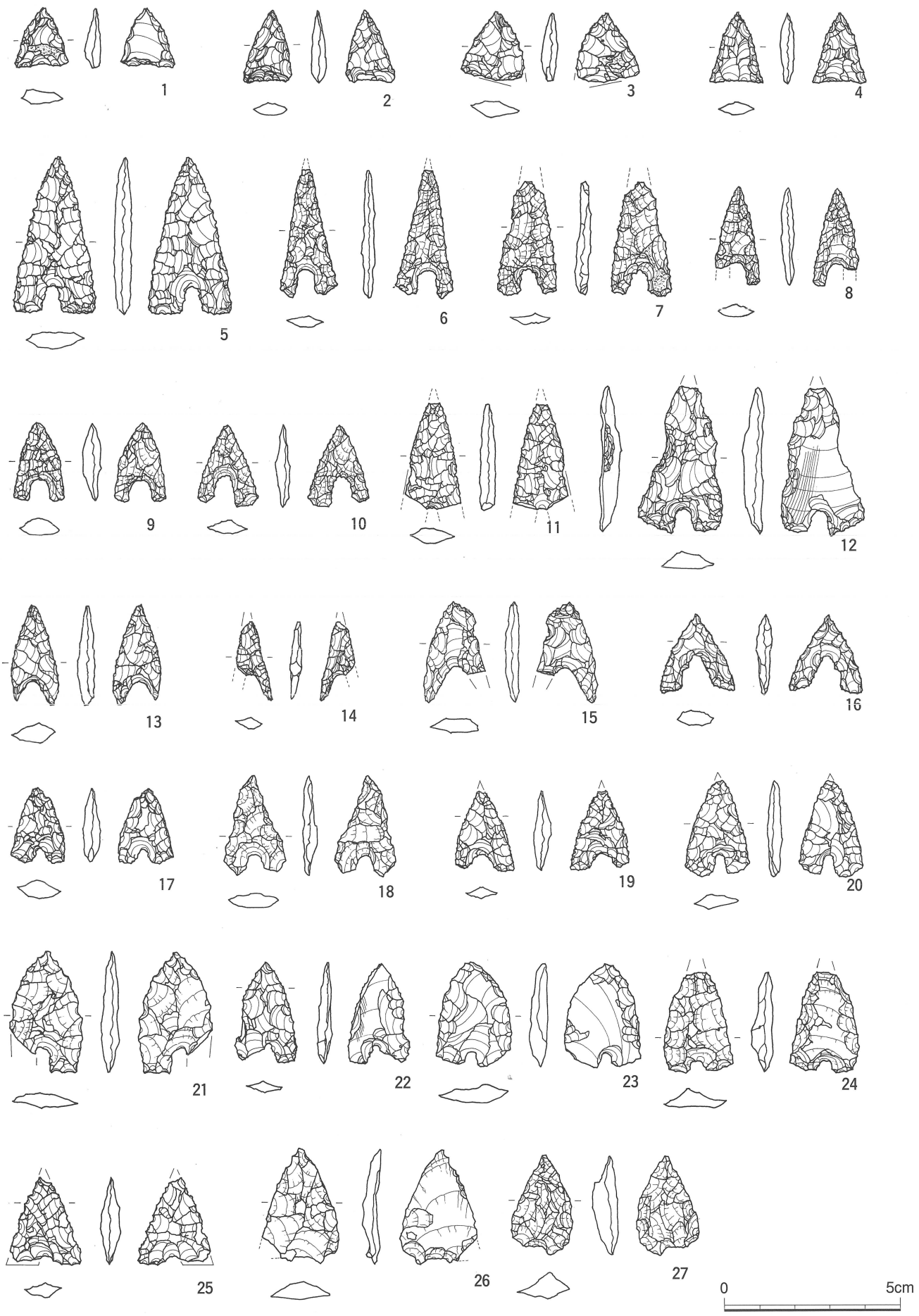
１～４は三角形を呈すもので，１は正三角形に近い形体で，基部は若干内湾する。薄い剥片を素材とし，周辺部のみの調整である。石材は青灰色黒曜石である。２は二等辺三角形を呈し，基部は若干内湾する。薄い剥片を素材とし，全面に細かい調整が行なわれている。石材は青灰色黒曜石である。３は基部を発掘時に欠損しておりその形状はわからないが，正三角形に近い形体を呈すと考えられる。石材は白色の縞状流理の入る黒色黒曜石である。４は末広がりの二等辺三角形を呈し，基部は若干内湾する。薄い剥片を素材とし，全面に細かい調整が行なわれている。石材は青灰色黒曜石である。５～12・16は二等辺三角形を呈し，基部の抉りがＵ字状で深いいわゆる「鍬形鏃」である。５は大型で，全面に丁寧な調整が施されており，左右対称で綺麗な二等辺三角形を呈す。石材は乳白色のチャートである。６も全面に丁寧な調整が施されており，左右対称で細めの二等辺三角形を呈す。先端部は欠損する。石材は安山岩である。７は左側縁に段を持つもので，右側脚部裏面に礫面を残す。石材は安山岩である。８は左右対称で綺麗な二等辺三角形を呈す。表裏面の中央部分には，素材剥片の剥離面が残る。石材は安山岩である。９・10は正三角形に近い形体で全面に丁寧な押圧剥離が施されている。９はやや厚みを残す。石材は安山岩である。11は先端部・脚部を欠損する資料である。石材は黒色黒曜石である。12はやや厚めで左右は非対称である。表面は全面に調整が行なわれているが，裏面は先端部及び脚部のみで，主要剥離面を大きく残す。また，左側縁は裏面からの剥離により中央部がノッチ状を呈す。石材は黒色黒曜石である。13は柳葉状で最大幅が胴部中央よりやや下位にあるもので鹿児島県帖地遺跡や長崎県大久保遺跡に見られる「帖地型石鏃」の範疇に入るものと考えられる。全面に丁寧な調整を行なっており，帖地や大久保のものに比べると抉りが深い特徴を示す。石材は黒色黒曜石である。14は細身で胴部中央に段を持つものである。脚部は細く長く作り出し，先端部は鋭く作り出している。石材はやや茶色の混じった黒色黒曜石である。15は未製品で脚部を長く作り出すものである。石材は黒色黒曜石である。16は正三角形に近い形状で抉りが深い。石材は青灰色黒曜石である。17～20は抉りの浅い二等辺三角形のもので全面に調整を行なう。石材は17・19・20が青灰色黒曜石，18が安山岩である。21～24・26は先端部の角度が鈍角で，両側縁は大きく外側に張り出す。調整はやや粗く，主要剥離面側は部分的にしか行なわない。また，基部の抉りは小さく浅い。いずれも素材剥片の形状を大きく残しており，弓形状の断面形を呈す。石材は21・25が安山岩，22・23が青灰色黒曜石，24が玄武岩である。25は抉りの浅い二等辺三角形のもので全面に調整を行なう。石材は青灰色黒曜石である。27は抉りの浅いいびつな二等辺三角形のもので全面に調整を行うものの，表面中央部は除去できずにかなり厚くなっている。石材は安山岩である。

スクレイパー（28・29　図版11）

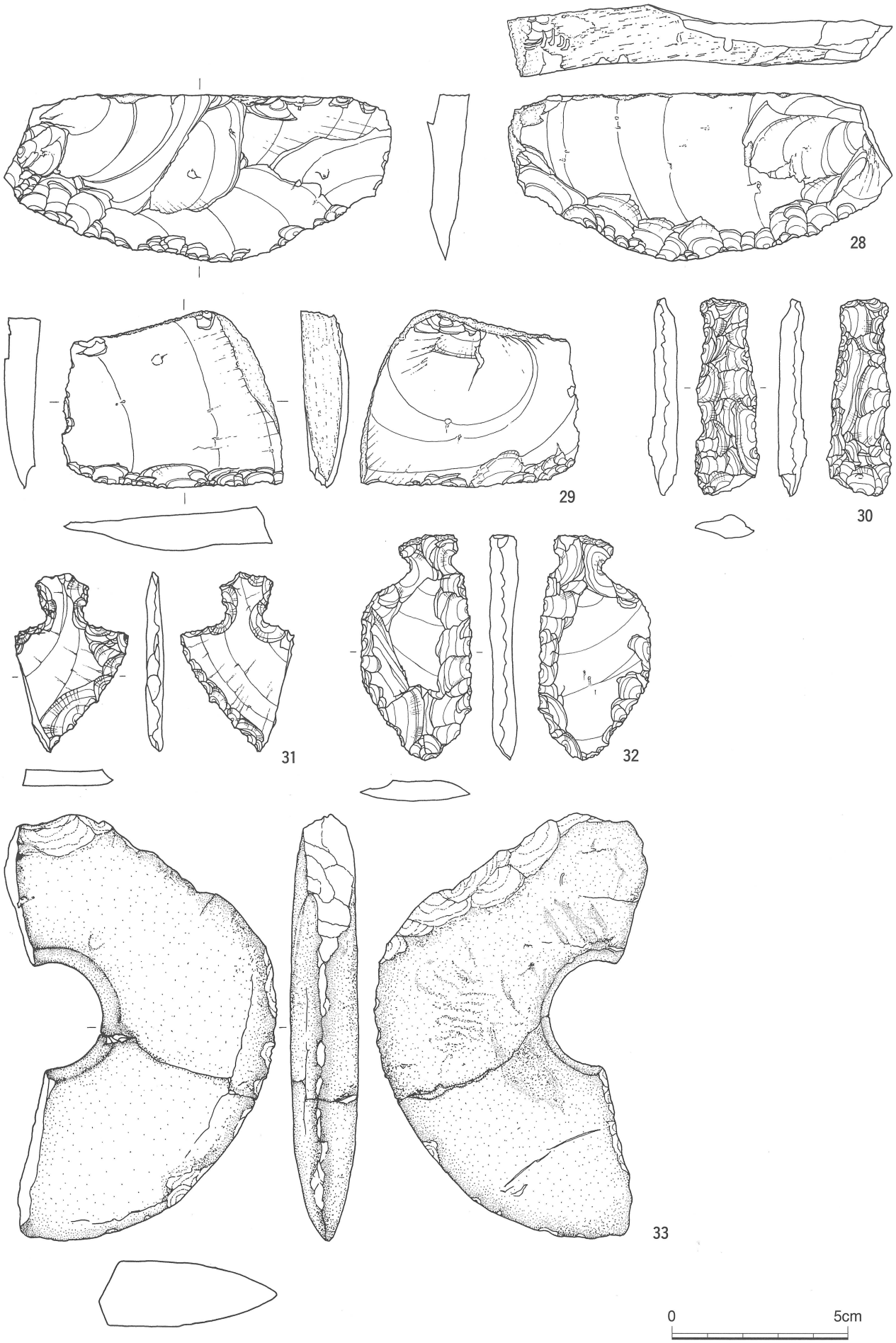
28は厚手の縦長剥片を素材とし，弓状に張り出す下辺の表裏面に細かい調整を行なう。上面や左側面に礫面を残す。石材は安山岩である。29は台形を呈す厚手の剥片の下辺の表裏面に細かい調整を行なう。28とは異なり直線的な刃部をなす。上面や左側面には礫面を残し，礫面に直接加撃し素材剥片を取り出している。石材は安山岩である。

石　　匙（30～32　図版11）

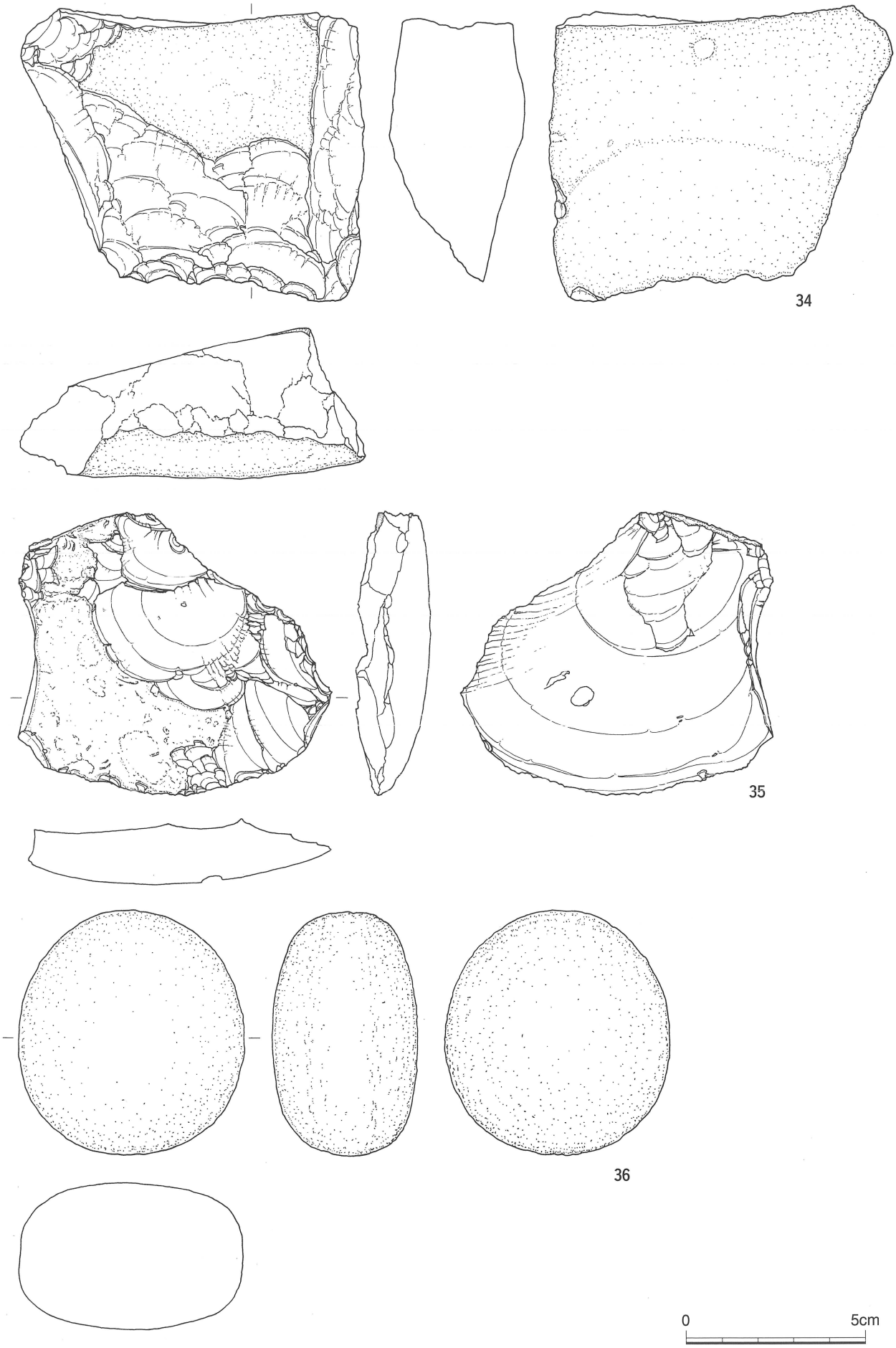
30は厚い短冊状で上部両側縁に若干抉りが入る。全面に丁寧な調整を行なう。石材は安山岩である。31は薄い剥片を素材とし，辺縁部のみに細かな調整を行なう。石材は安山岩である。32はやや厚手の剥片を素材とし，辺縁部に細かく丁寧な調整を行なう。上部両側縁には大きな抉りによりしっかりとしたつまみを作り出す。打面は自然面である。石材は青灰色黒曜石である。



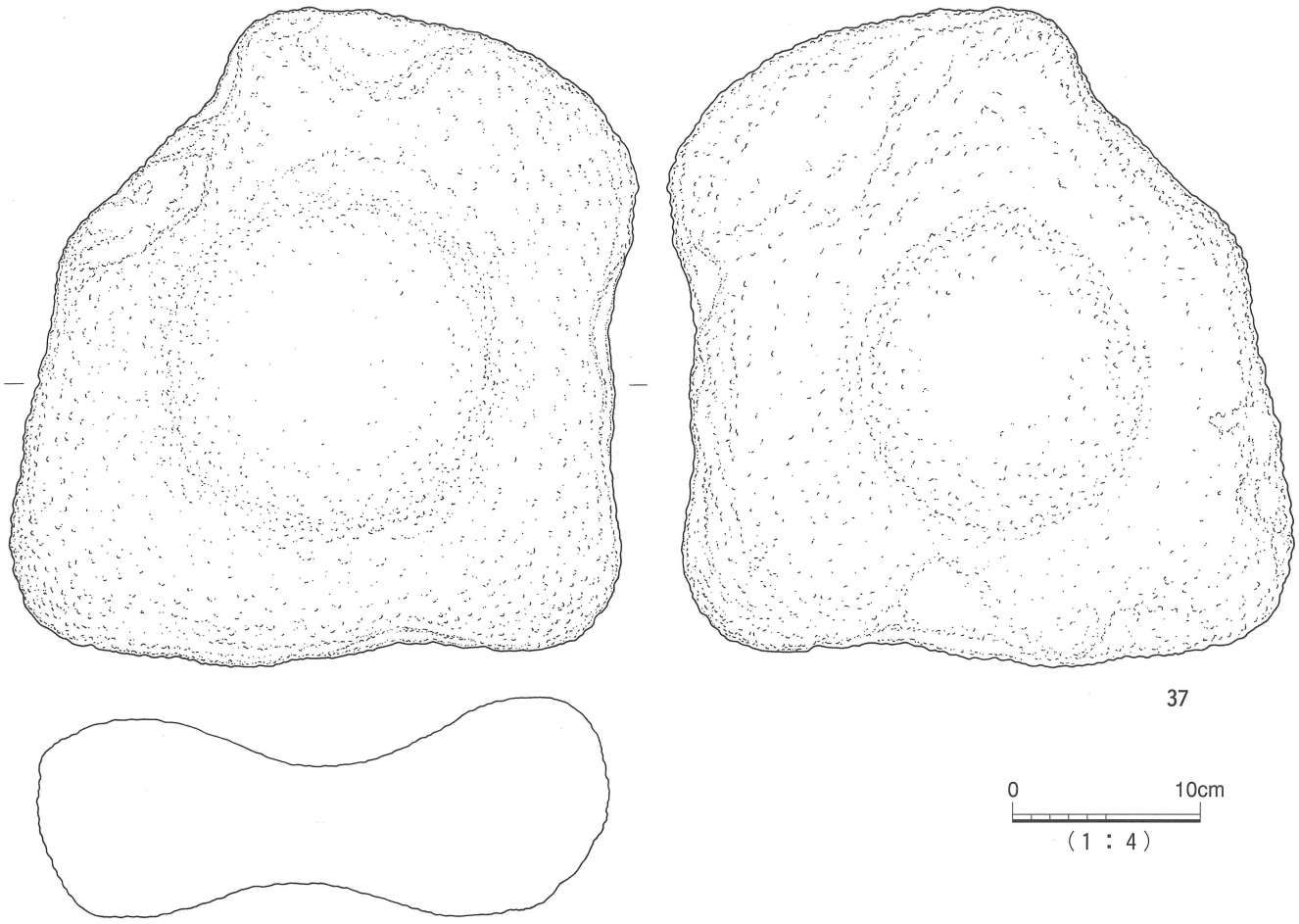
第21図　縄文時代の石器①（2／3）

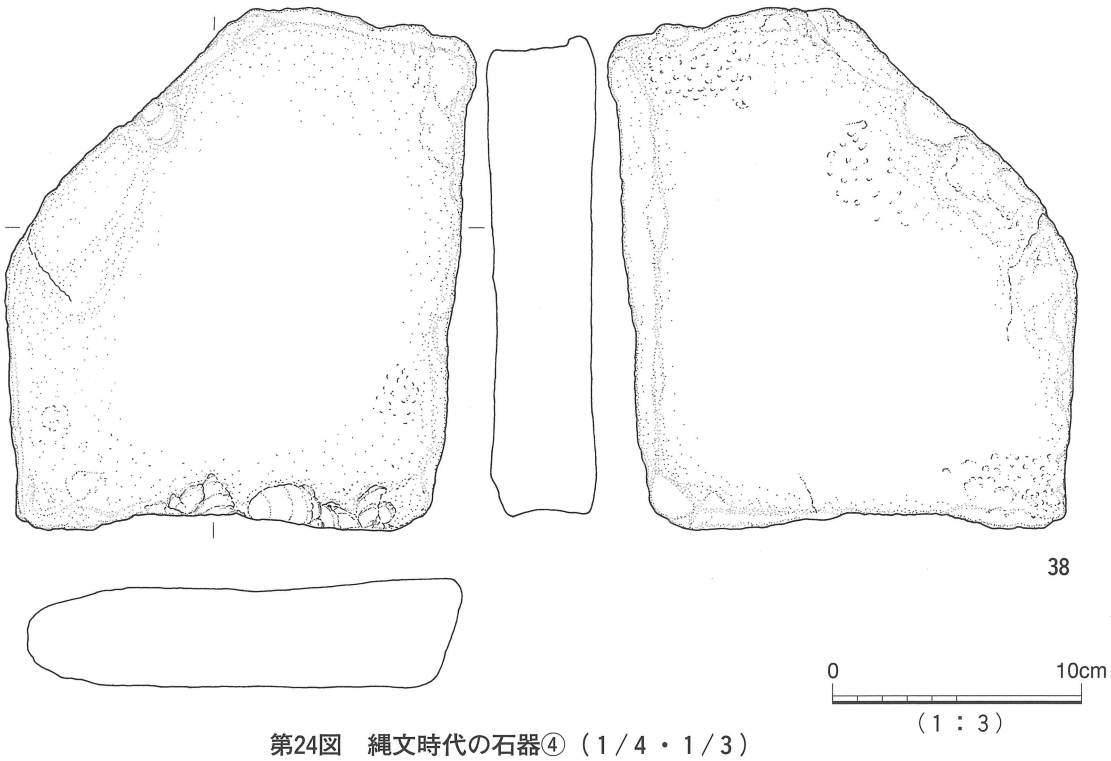


第22図　縄文時代の石器②（2/3）



第23図　縄文時代の石器③（2/3）





第24図　縄文時代の石器④（1/4・1/3）

図	番号	器　種	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
21	1	石鏃	青灰色黒曜石	17.0	15.5	4.5	0.8	
	2	石鏃	青灰色黒曜石	20.5	14.0	4.5	0.9	
	3	石鏃	黒曜石	19.5	18.5	5.0	1.3	
	4	石鏃	青灰色黒曜石	20.0	15.0	4.0	0.8	
	5	石鏃	チャート	44.0	23.0	5.0	4.4	
	6	石鏃	安山岩	36.0	16.5	4.0	1.4	
	7	石鏃	安山岩	32.0	17.0	5.0	1.9	
	8	石鏃	安山岩	28.0	12.5	4.5	0.8	
	9	石鏃	安山岩	22.0	15.0	5.0	1.1	
	10	石鏃	安山岩	23.0	17.0	4.5	0.8	
	11	石鏃	黒曜石	30.0	15.5	4.5	2.0	
	12	石鏃	黒曜石	41.0	23.0	6.0	3.8	左側面ノッチ状加工
	13	石鏃	黒曜石	28.0	14.0	5.0	1.3	帖地型石鏃
	14	石鏃	黒曜石	22.0	10.5	3.0	0.4	
	15	石鏃	黒曜石	28.5	17.5	4.0	1.4	
	16	石鏃	青灰色黒曜石	22.5	21.0	5.0	1.0	
	17	石鏃	青灰色黒曜石	21.0	15.5	5.0	1.1	
	18	石鏃	安山岩	28.0	17.5	4.0	1.3	
	19	石鏃	青灰色黒曜石	22.5	16.5	5.0	1.1	
	20	石鏃	青灰色黒曜石	27.0	18.5	4.0	1.3	早期剥片鏃
	21	石鏃	安山岩	34.0	21.0	5.0	2.7	早期剥片鏃
	22	石鏃	黒曜石	28.5	18.0	4.5	1.6	早期剥片鏃
	23	石鏃	青灰色黒曜石	29.0	21.0	5.0	3.0	早期剥片鏃
	24	石鏃	玄武岩	28.5	19.5	6.0	2.7	早期剥片鏃
	25	石鏃	青灰色黒曜石	23.0	20.0	6.0	1.8	
	26	石鏃	安山岩	32.0	21.5	5.0	2.6	早期剥片鏃
	27	石鏃	安山岩	28.0	18.0	7.5	2.6	
22	28	スクレイパー	安山岩	47.0	108.0	12.0	81.2	
	29	スクレイパー	安山岩	49.0	61.5	13.5	40.6	
	30	石匙	安山岩	55.0	18.0	8.0	7.7	
	31	石匙	安山岩	50.0	32.0	5.0	7.1	
	32	石匙	青灰色黒曜石	62.5	31.0	8.0	14.4	
	33	環状石斧	砂岩	118.0	76.5	19.0	190.2	
23	34	礫器	角閃石安山岩	109.0	127.0	51.0	799.7	
	35	石核	安山岩	104.0	115.0	28.0	300.9	
	36	磨石	角閃石安山岩	89.0	82.5	54.0	616.2	
24	37	石皿	角閃石安山岩	354.0	338.0	118.0	20,850.0	表裏面とも凹状加工
	38	石皿	砂岩	207.0	186.0	43.0	2,500.0	

第8表　縄文時代石器計測表

環状石斧（33　図版12）

33は全体に丁寧に作りこまれた環状石斧である。ほぼ半分を欠損するが刃部は薄く一直線に加工され，中央の穿孔も大きくしっかりしている。石材は砂岩である。

礫　　器（34　図版12）

34は分厚い片刃の礫器で，裏面から大きな数度の剥離で刃部を形成した後，さらに細かい調整剥離を行なう。裏面は全面自然面で，表面も大きく自然面を残す。石材は角閃石安山岩である。

石　　核（35　図版12）

35は厚手の大型剥片で，自然面への加撃で大きく剥ぎ取られたものである。薄く幅広な剥片を取り出すための石核で，表面右側から数度にわたり剥片を搾取した痕が看取できる。石材は安山岩である。

磨　　石（36　図版12）

36は磨石で，平面形はほぼ円形で分厚く全面に磨耗が激しい。石材は雲仙岳産出の角閃石安山岩である。

石　　皿（37・38　図版13）

37は大型で，重量は20kgを越す。表裏面とも凹状の加工が施されている。石材は地元の角閃石安山岩である。38は表面の中央部分に若干凹状の加工が施されている。石材は砂岩である。

第5章　ま　と　め

松尾遺跡からは中期旧石器時代と想定される石器群，後期旧石器時代初頭の石器群，ナイフ形石器石器群（ＡＴ降灰後），縄文時代早期，縄文時代晩期及び古墳時代と６時期にわたって遺跡が存続していることが判明した。しかしながら，文化層として捉えることができたのは縄文時代早期と古墳時代の２時期のみで，それ以外の時期の遺物は縄文早期包含層中に混在する。本稿では，それぞれの時代について概観する。なお，本遺跡の遺物についてはすべてドットマップを作製しているが，今概報では遺物の水平分布・垂直分布の検討，遺物間の接合作業などはほとんど行なっていない。本報告時にそれらの作業を行い，あらためて再検討を行ないたい。

第１節　旧石器時代について

後期旧石器時代に先行すると思われる石器群（第10図　図版16）

第４章第１節において述べているように，「斜軸尖頭器」として以前報告（川道・辻田2000）した２点である。今概報では「周縁調整石器」と改めている。ねつ造事件後その存在について厳しい意見が多く見受けられるが，今回の概報では以前紹介したときの内容を，ほぼそのまま踏襲するかたちで報告している。土壌堆積の貧弱な長崎地方では，多くの時代の遺物が混在して検出されることは珍しくなく，その中から可能性のある遺物を抽出していくことは，必要不可欠な作業と考えられる。本遺跡の資料が今後どのように判断されていくかわからないが，これまでと同様，中期旧石器的様相を示す石器を探していく必要があろう。もちろん，層位的な検出例を探すことが最も必要である。

後期旧石器時代初頭石器群（第11図　図版17）

こちらも第４章第１節において述べているとおりである。萩原博文氏の編年（萩原1996）に照らすと早期後半におくことができよう。縄文時代の包含層に混在するかたちではあるが県内では数少ない当該期の資料であり，今後は本来の包含層からの検出が急務であろう。

ナイフ形石器石器群（第12・13図　図版18）

この石器群は，ナイフ形石器６点（国府形ナイフ２点，九州形ナイフ形石器２点，他２点），切出形石器７点，台形石器１点，剥片尖頭器１点，三面加工尖頭器３点，ノッチ３点である。これらの組成及びそれぞれの石器の特徴から，原の辻型台形石器を含まないものの，おおむね萩原博文氏の編年によるところの中期後半と理解しておきたい。また，この石器群では，狸谷型ナイフ形石器に類似する切出形石器が主体となるが，その特徴について述べたい。狸谷遺跡出土の資料とは若干異なる特徴を示す。第一に表面に平坦剥離を施すものが多くある。第12図20．21．23．25の資料である。このことは長崎県内の当該資料を集成した岩谷史記氏が「長崎県域における地域的な特徴であると思われる」と指摘している（岩谷1999）。第２に背面から長側縁部分を加工する際，先行して上方及び下方から剥離を行なうものがある。第12図19．20．23の資料である。この特徴は前述の岩谷史記氏の集成した県内の資料には見られない。また，狸谷遺跡でも見ることはできず，現時点では松尾遺跡特有のものとしておく。

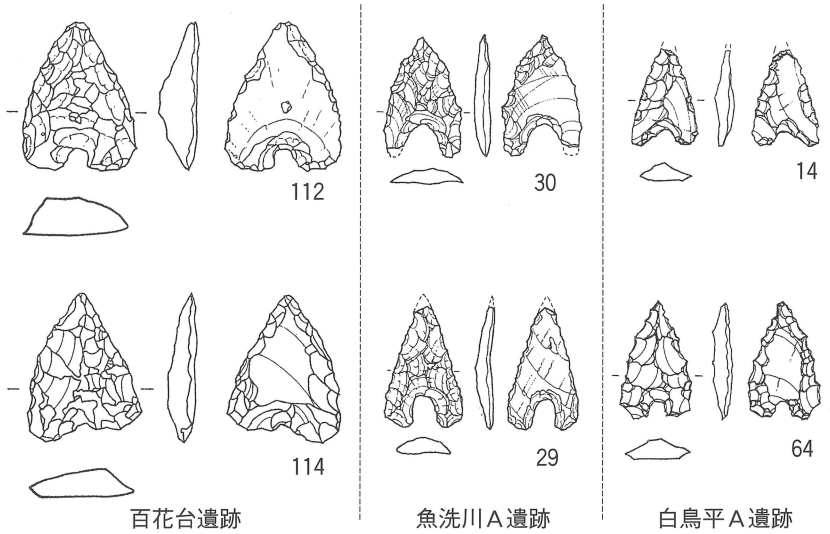
第２節　縄文時代について

本遺跡の中心となる時期は縄文時代早期であり遺物の量も豊富である。集石遺構及び土坑も検出されているが，確実に縄文時代に属すものか詳細な検討を行なっておらず，詳しく言及することができない。晩期の土器も若干検出されているが，ここでは早期にしぼって話しを進めたい。はじめに土器

について概観する。

出土土器は条痕文系土器，押型文土器，平栫様式土器，である。条痕文系土器（第14図１～８・図版９）はゆるい尖底で，胴部が開き，口縁部がラッパ状となる，と考えられる器形である。これらの土器は類例に乏しく，現時点でははっきりとした所属時期について言及できないが，本遺跡では最も古い時期の土器と理解しておきたい。また，第14図８については一野式とも考えられるが，断定は難しい。押型文土器についてはおおむね田村式土器（第15・16図９～28　図版10・11）と少量の手向山式土器（第16図29～33　図版11）である。第16図20・23の内面の施文方法は後続する手向山式土器の祖形の可能性も考えられ興味深い。平栫様式土器は石坂上式・栫ノ原式土器である。特筆すべき点は壺形土器の検出であり，県内では百花台遺跡に次ぐ発見である。福永裕暁氏によれば，「壺形土器の有無が定住性を考える上で重要な要素」（福永1995）としており，島原半島では早期後半の時点で定住生活の可能性をみてとれる。また，耳栓が２点検出されているが長崎県では初見であり，こちらも注目される資料である。南九州において耳栓は石坂上式土器との供伴に限られているようであり，松尾遺跡の資料も同様と考えられる。新東晃一氏は「今後資料の増加に，その使用は数型式に及ぶと考えられる」また，「耳栓は小型で細片のため意外に見落とす可能性があり，発掘調査及び，整理作業において細心の注意が必要としている（新東1993・1996）。県内の資料をもう一度洗いなおす必要があろう。特に，百花台遺跡では最近の再検討によって壺型土器が検出されており（古門1999），今後も更なる発見が期待される。

石器は石鏃44点，スクレイパー９点，石匙３点，環状石斧１点，石皿10点，磨石20点，磨製石斧２点，打製石斧１点，石核１点などが検出されている。今後の整理作業により若干の数の変動があると予想される。また，先述の３時期の土器群のいずれと供伴するか言及できる石器は少ない。今回は石鏃の時期について若干検討したい。図示した27点について特徴のあるものについて述べる。第21図１～４は，先述したように岩下洞穴や泉福寺洞穴において条痕文土器などと共に検出されている二等辺三角形の石鏃である。松尾遺跡では層位的に検出されていないが，第14図１～８の条痕文系土器群と供伴するものと想定しておきたい。第21図５～12・16はいわゆる「鍬形鏃」で，押型文土器に普遍的に供伴することは周知の事実であり，松尾遺跡でも当該期の土器と供伴すると考えられる。第21図21～24・26は，先端部の角度が純角，両側縁が外側に張り出す，基部の抉りが小さい，主要剥離面側への調整が少ない，等の特徴を示し、素材の形状を大きく変更しない石鏃である。その所属時期だが，松尾遺跡では，条痕文系土器に二等辺三角形の石鏃，押型文土器に鍬形鏃と想定しており，残すは平栫様式土器のみである。このことは近隣の遺跡からも同じような事例が観察される。国見町の百花台遺跡群の魚洗川Ａ遺跡（田川1994）では同じような特徴の石鏃が２点出土しており，石坂上式土器も出土している。同じ



第25図　松尾遺跡早期剥片鏃類似資料（２/３）
（図中の番号は各報告書の図番号に符合）

く百花台遺跡（田川・副島・伴1988）でも２点出土しており，塞ノ神式土器が検出されている。これに対して，同じ島原半島の押型文土器単純遺跡である吾妻町弘法原遺跡（高野1983・村川1992）では見ることができない。また，塞ノ神式土器が多く出土する熊本県白鳥平Ａ遺跡（宮坂1993．３）では，石鏃の表裏面に素材剥離面を残すものを抽出し，石鏃の制作工程を復元している。その中で完成品とされているものは松尾遺跡のものよりもややスリムな印象を受けるが，ほぼ同じような特徴を示している。これらの石鏃は，その形状から剥片鏃の範疇に入ると考えられるが，後期以降のいわゆる「剥片鏃」と区別するために「早期剥片鏃」と仮称し，石坂上・栫ノ原式土器に供伴する可能性を示しておきたい。今後類例を探すと共に再度検討を行ないたい。

第３節　古墳時代について（第６図　第８・９図　第９表　図版２）

上記以外で今回の調査において注目すべきは竪穴住居跡とその覆土から出土した土器群である。16区は松尾遺跡の所在する丘陵上平坦面中央にあたり，主軸をほぼ方位に合わせている。現在盛土保存された部分に住居跡が広がるものとおもわれ，集落遺跡として期待される。住居跡直上で検出された土坑覆土から出土した土器のなかでも，ほぼ完形に復元できる小型丸底土器や甕などは住居跡覆土に含まれていたものである可能性が強く，一括性の強い土器群として捉えることができる。特に，小型丸底土器は布留式の特徴をもつ良好な資料であり，供伴する土器もそのころの所産である。また，出土した甕は尖底の球体に復元でき底部は煤の付着が見られながらも摩滅し，床面中央に焼土が検出されているため，つくり付けの竈ではなく炉であったと推定される。平面プランは隅丸方形を呈し，中央に炉が想定され、焼失家屋であることも注目すべきである。

島原半島内の竪穴住居跡報告資料は，国見町上篠原遺跡・矢房遺跡，島原市稗田原遺跡，北有馬町今福遺跡の４例があり，今回で５例目となる。基本的作業として標高・平面プラン・規模・柱穴配列・炉（竈）配置を比較してみたい。**（第９表）**所属時期が最も古いものは，今福遺跡（宮崎1986）Ｃ９・10区で検出されており，報告者は弥生時代終末から古墳時代初頭とする。詳細は報告書にゆずるが，平面プランが円形で，規模は復元で直径10m前後，柱穴は壁面から２ｍほどの内周にめぐる円形配列で，２～３重となる。炉の位置は中央と東に炭の集中区があり，壁面に沿って幅１ｍほどのベット状遺構が検出され，貼床も一部で確認されている。稗田原遺跡（古門1997）は，古門編年Ⅲｂ期を示す土器群が床面から出土した良好な資料である。平面プランは隅丸方形で規模は１辺4.3mほどに復元でき，柱穴は中央に１本，その南北50㎝離れた位置に各１本確認されている。上篠原遺跡(諫見1988)は陶質土器３点を基準として４世紀末～５世紀初頭を主とする良好な一括土器群を含む。平面プランは隅丸方形で、東西約６ｍ南北約７ｍ，柱穴は錯綜しており立替などによる「複合柱穴」としている。炉と考えられるものは，中央にみられる赤色土（焼土）と東辺中央近くにみられる方形掘込み炉跡である。矢房遺跡（辻田2001）は半分ほどの検出であるが，平面プラン隅丸方形に復元でき１辺４ｍほどである。柱穴は壁面から内側に約１ｍの位置に各１本検出されており，ほぼ対角線上に位置する。

遺跡名	標高(m)	プラン	規模(m)	柱穴配列	炉･竈配置	備　　考
今福	25～27	円形	径10	円形配列	中央？	弥生終末～古墳初頭
松尾	50～60	隅丸方形	１辺4.3	偏在	中央	布留式併行・焼失崩壊
稗田原	20～25	隅丸方形	１辺4.3	中央？	－	古門Ⅲｂ期
上篠原	30	隅丸方形	６×７	－	中央？	陶質土器
矢房	50～60	隅丸方形	１辺４	対角線上	－	古門Ⅳ期

第９表　島原半島の古墳時代住居跡（2002．３現在）

床面出土土器群は一括資料であり，所属時期は形態的特長から古門編年Ⅳ期に位置付けておく。松尾遺跡で今回検出された住居跡は，隅丸方形プラン，規模が１辺4.3m，炉は中央に復元できる。覆土からの出土遺物には典型的な小型丸底土器（坩）が２例あり，甕口縁部には布留式の影響が見られるため，４世紀中ごろを中心とした年代を考えている。現在のところ今福遺跡に続く住居跡として位置付けでき，布留系土器群の登場に伴い隅丸方形プランの住居跡が登場することが確認された始めての住居跡として重要な位置を持っている。層位出土品には，５世紀末～６世紀初頭の時期の須恵器片がみられ，集落は継続して営まれていたものと考えられる。また，島原半島北東部分（島原～国見）で４世紀以降，住居跡に隅丸方形プランが定着していくことは，４世紀代の前方後円墳とおもわれる守山大塚古墳や５世紀～６世紀代の一野古墳群（宇土・竹中2001）を抱える地域として重要であり，今後さらに確認していかねばならない事実である。

参考文献

宇土靖之・竹中哲朗編2001『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告書第14集　有明町教育委員会
諫見富士郎編1988『上篠原遺跡』概要報告書　長崎県立国見高等学校考古学研究部
川道寛1997「第Ⅲ部　五万長者遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第133集
川道寛・小松旭・古門雅高・渡邊康行編1998『広久保遺跡』江迎町文化財調査報告書第１集　長崎県江迎町教育委員会
高野晋司編1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財７　長崎県吾妻町教育委員会
田川肇・副島和明・伴耕一郎1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集
田川肇編1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集　長崎県教育委員会
松藤和人1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第８冊　同志社大学文学部文化学科
宮坂孝宏編1993.3『白鳥平Ａ遺跡』熊本県文化財調査報告書　第127集　熊本県教育委員会
宮崎貴夫編1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集　長崎県教育委員会
村川逸郎編1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13　長崎県吾妻町教育委員会

岩谷史記1999「長崎県域における狸谷型ナイフ形石器の分布について」『西海考古』創刊号　西海考古同人会
小田静雄・竹岡俊樹『前期旧跡問題の真相を語る』勉誠出版　SCIENCE of HUMANITY Vol.34
加藤真二2001『中国北部の旧石器文化』同成社
新東晃一1996「もう一つの縄文文化」『南九州縄文通信』No.10南九州縄文研究会
辻田直人2001「国見町矢房遺跡一括出土遺物について」『西海考古』第４号　西海考古同人会
川道寛・辻田直人「長崎県国見町の中期旧石器時代と後期旧石器時代の石器群『旧石器考古学』59　旧石器文化談話会
中川和哉2001「九州の前期・中期旧石器時代について」『旧石器考古学』62　旧石器文化談話会
萩原博文1996「第２章　平戸の旧石器時代」『平戸市史　自然・考古編』長崎県平戸市
福永裕明1995「石器組成から見た南九州早期後半の壺形土器出土遺跡」『古文化談叢』第34号　九州古文化研究会
古門雅高1999「発見塞ノ神式の壺形土器－百花台遺跡出土資料より－」『西海ニュース』第10号　西海考古同人会
古門雅高1999「黄金山古墳出土土師器の検討」西海考古創刊号　西海考古同人会
古門雅高1997「有明海西部地域の古式土師器」『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会
本馬貞夫1996「五万長者屋敷」『図説長崎県の歴史』河出書房新社
国見町1984『国見町郷土史』
旧跡文化談話会2001『旧石器考古学辞典』学生社